

An aerial photograph of a rural landscape, likely in Japan. The image shows a river or stream winding through the lower portion of the frame. The surrounding area is a mix of agricultural fields, some with distinct patterns, and clusters of buildings or structures. The overall tone is dark and grainy, characteristic of an old black and white photograph.

史跡上野国分寺跡

発掘調査概要 7

1986

群馬県教育委員会

序

県が重要施策の一つとして進めている史跡上野国分寺跡の保存整備事業も7年目を迎えました。この間に行われた発掘調査により、寺域や伽藍の様子も次々と明らかにされ、1200余年前に建立された壮大な寺院の全体像が把握できるようになりました。今年度の調査においては、国分寺建立以前にこの地に住んでいた人々の家の跡、また修理の際に設けられた鍛冶場の跡などが発見されました。このことは国分寺の造られた地が無人の荒野であったのではなく、私たちの先人の長い歴史の舞台であったことを示しております。これらの成果を活用して、史跡の整備に着手する機もいよいよ熟してきたと言えましょう。

今年度の調査の概要を紹介し、今後の事業を進める一助として本書を刊行しました。関係者をはじめ皆様に広くご活用いただければ幸いです。

おわりに、本事業を進めるにあたって多大なご指導とご協力を賜った文化庁、地元教育委員会などの各機関、また地元の皆様をはじめとする多くの方々に衷心より謝意を表する次第です。

昭和62年3月31日

群馬県教育委員会教育長 千吉良 覚

目 次

<p>I 遺跡の位置と立地環境…………… 1</p> <p>1. 位 置…………… 1</p> <p>2. 立地環境…………… 2</p> <p>II 調査に至る経過…………… 3</p> <p>III 昭和55～60年度調査の概要…………… 3</p> <p>1. これまでの調査と研究…………… 3</p> <p>2. 昭和55年度の調査…………… 5</p> <p>3. 昭和56年度の調査…………… 5</p> <p>4. 昭和57年度の調査…………… 6</p> <p>5. 昭和58年度の調査…………… 7</p> <p>6. 昭和59年度の調査…………… 8</p> <p>7. 昭和60年度の調査…………… 9</p> <p>IV 調査の概要…………… 10</p> <p>1. 目的および調査方法…………… 10</p>	<p>2. 調査の経過…………… 12</p> <p>3. 第30次調査…………… 13</p> <p>(1) 遺 構…………… 13</p> <p>(2) 遺 物…………… 20</p> <p>4. 第31次調査…………… 26</p> <p>(1) 遺 構…………… 26</p> <p>(2) 遺 物…………… 32</p> <p>5. 第32次調査…………… 38</p> <p>(1) 遺 構…………… 38</p> <p>(2) 遺 物…………… 40</p> <p>V 文 字 瓦…………… 42</p> <p>VI ま と め…………… 44</p> <p>図 版…………… 46</p>
---	--

例 言

1. 本書は、群馬県群馬郡群馬町東国分・同引間、前橋市元総社町に所在する史跡上野国分寺跡の昭和61年度保存整備事業に伴う発掘調査の概要である。
2. 本調査は、国庫補助事業として群馬県教育委員会が実施した。
3. 本調査は、史跡上野国分寺跡整備委員会の指導を受け、群馬県教育委員会文化財保護課専門員前沢和之および調査補助員関口功一が担当し実施した。
4. 出土遺物については整理途中であるため、その一部に触れるにとどまる。
5. 出土した遺物は群馬県教育委員会が保管している。
6. 本書の作成、編集は前沢和之が担当し、遺構実測・写真撮影は前沢和之が担当した。遺物実測および実測図トレスは関口功一が担当した。

史跡上野国分寺跡整備委員会委員・幹事

<p>委員</p> <p>大國軍之丞(委員長・県文化財保護審議会委員)</p> <p>坪井 清足(副委員長・前奈良国立文化財研究所長)</p> <p>大塚 初重(明治大学教授・考古学)</p> <p>平野 邦雄(東京女子大学教授・古代史)</p> <p>近藤 義雄(県文化財保護審議会委員・中世史)</p> <p>藤井 精一(前橋市長)</p> <p>志村喜三郎(群馬町長)</p> <p>女屋 覚元(県総務部長)</p> <p>柳沢 宏(県土木部長)</p> <p>千吉良 覚(県教育委員会教育長)</p> <p>福島 正巳(県教育委員会管理部長)</p> <p>退任</p> <p>石田 重男(前県教育委員会管理部長)</p>	<p>幹事</p> <p>田中 哲雄(奈良国立文化財研究所技官・史跡整備)</p> <p>福田 拓(造園家)</p> <p>松島 栄治(県立前橋第二高等学校教諭・考古学)</p> <p>井上 唯雄(県埋蔵文化財調査センター所長)</p> <p>富田 敏彦(県総務部財政課総括課長補佐)</p> <p>青柳 健一(県土木部都市施設課課長補佐)</p> <p>矢沢 隆資(県都市公園事務所長)</p> <p>梅沢 重昭(県教育委員会文化財保護課長)</p> <p>原田 恒弘(同 埋蔵文化財第2係長)</p> <p>前沢 和之(同 専門員)</p> <p>退任</p> <p>山本 肇(前県土木部都市施設課参事)</p> <p>森田 秀策(前県教育委員会文化財保護課長)</p> <p>近藤 功(県埋蔵文化財第2係長)</p>
---	---

I 遺跡の位置と立地環境

1. 位置

関東平野の北西隅、前橋市街地の西方約4kmで、群馬郡群馬町東国分・同引間・前橋市元総社町に跨る位置にある。地形的には榛名山東南麓に広がる扇状地の末端にあたり、南を染谷川、北を牛池川に挟まれる北西から南東への緩い傾斜を示す微高台地上に立地する。寺域の北西部は標高129.0m、南東部は127.5mを測る。西から妙義・浅間・榛名・小野子・手持・武尊・赤城の山々を眺み、南には平野が広がる景観をもつ。

史跡地の北側に町道、東と西側に小道が走り、南にはテラス状の平坦地が約100m続いて染谷川に至る。北側には群馬町東国分の集落が近接するが、南・東・西方は畑と水田で家屋は少なく、比較的良好な環境が保たれている。寺域内は北半部に民家と墓地があり、中央部には金堂と塔跡が土壇状に残る以外は畑地であり、かつては桑園であった。

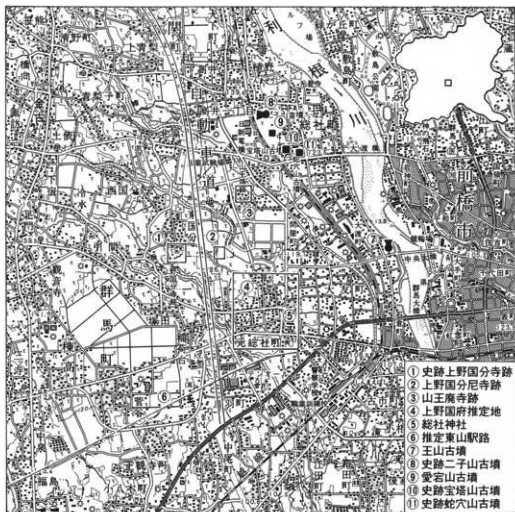


Fig. 1 史跡上野国分寺跡と周辺の遺跡 1/50,000

2. 立地環境

東方約500mに国分尼寺跡がある。昭和45年に行われた調査で6×4間の講堂と推定される礎石建物が確認されているが、伽藍配置・寺域の範囲については不明な点が多い。現在は畑地となっており比較的良好な環境を保っているため、今後調査が行われればそれらも明らかにされることが期待される。南東約1.4kmには国府推定地がある。市街地化が進んでいるが、旧総社の跡とされる小祠などがあり、南面には推定東山駅路に接して人為的とみられる段差が認められる。また北東約1kmには7世紀後半の創建である山王廃寺がある。ここには地下式の塔心礎や石製島尾・根巻石が残っており、「放光寺」とヘラ書きされた瓦が出土している。国分僧寺と尼寺の間を南北に貫くように建設された関越自動車道の敷地の発掘調査では、縄文時代から近世まで各時代の遺構が検出されているが、奈良—平安時代の集落も多く確認されており、そこから出土した瓦や石材、「法華寺」と墨書された土器などの遺物と併せて国分二寺の立地や変遷と密接な関連を示している。そして、南約3.5kmの日高遺跡では広い範囲に条里制地割をもつ水田址が検出されている。これらの遺跡の所在から、この一帯が律令制下における上野国の中核部をなしていたことが知られる。



Fig.2 史跡上野国分寺跡全景 (昭和56年3月撮影)

Ⅱ 調査に至る経過

上野国分寺跡は、平安時代中頃の記録が残る稀有な遺跡として知られており、大正15年10月20日付で史跡に指定された。指定面積は62,092㎡で寺域の南面部分も含んでいる。昭和43年に関越自動車道の基本計画が、その翌年には整備計画が発表されたが、それによるとこの自動車道は国分寺跡の東側約150mのところを南北に走り、南東約2kmのところには前橋インターチェンジができることになった。この開通により国分寺周辺への開発の波及は必至の情勢となり、群馬県教育委員会ではこの保存のため指定地の公有化を検討し、昭和47年度から地権者との折衝を開始した。その結果、史跡上野国分寺跡土壌買上事業は昭和48年度から開始され、以後昭和61年度までに総事業費11億1,922万円、買上面積は51,463㎡で全体の82.9%となった。

この土地の買上事業の進展に伴い、昭和55年度から史跡上野国分寺跡整備委員会を発足させるとともに、遺構を確認し整備のための各種の資料を得るべく発掘調査に着手した。

Ⅲ 昭和55～60年度調査の概要

1. これまでの調査と研究

国分二寺は天平13年(741)に建立が命じられたが、寺地の占定や工事などは難航したようである。そのような状況の中で天平19年(747)に再び詔が発せられ、国司らに対して督促がなされるとともに、郡司層の力に拠って早期に完工することが目論まれた。それによると郡司らが3年以内に塔・金堂・僧坊を完成させたならば、その子孫は代々郡領に任用するとの条件が出された。「続日本紀」天平感宝元年(749)紀には当国国分寺に知識物を献じたことによる叙位が5例記されているが、これは督促の詔に対応する記事と看做される。この内の2つが上野国分寺関係で、碓氷郡の石上部君諸弟と勢多郡少領の上毛野朝臣足人の名が掲げられている。このことから上野国分寺は749年頃には伽藍の主要部分が完成していたものと推定され、全国の国分寺の中でも最も早期に一応の姿を整えたものの1つと言うことができる。また長元3年(1030)に作成された「上野国交替実録帳」には、1020年頃の上野国分寺の衰退の状況がかなり詳細に記されている。それによると本尊である釈迦丈六像、脇士の普賢菩薩、文殊師利菩薩、四天王、吉祥天、毘沙門天などの諸像は破損はあるものの良好な姿をとどめており、また長保3年(1001)に出された官符にもとづいて国司が丈六十一面観音像を造り、金堂に安置したとの記録がみえることから、金堂はまだ健全な状態にあったとみられる。これに対して周辺の築垣や南大門、東大門、西大門、萱葺僧房、大衆院などは無実(滅失)となっていたことが記されている。これによって創建から約270年を経た時期には、伽藍の主要部に較べて、縁辺部の荒廃が進んでいたことが知られる。この文書には国府に保管されていた度縁30枚と戒牒30枚、省符30枚が既に無実となっていたことも記されているが、これらはその内訳が各々僧20人、尼10人分とされていることから、国分二寺の僧尼に係わるものとみられる。このように上野国分寺は創建期と衰退期に関する史料が残されている稀有な例として注目されてきた。

上野国分寺についての研究は福島武雄「上野国々分僧寺址考」(「上毛及上毛人」53号 1921年)

が嚆矢であり、現在地を僧寺跡に当て、現在の尼寺跡もその範囲と想定した。これによれば東西7町・南北4町で、主要伽藍は現在地に、僧房・雑屋が現尼寺跡にあると推定された。また尼寺は山王庵寺跡に比定された。宮地直一「上野国分寺に就いて(上)・(下)」(『史蹟名勝天然記念物』第1集 第2・3号 1926年)では「上野国交替実録帳」をとり上げ、その内容の検討と現地の状況とを照合する研究がなされた。その後、相川龍雄「上野国分寺」(『国分寺の研究』所収1938年)、太田静六他「上野国分寺伽藍の研究」(『建築学会論文集』27号 1942年)、太田「上野国分寺伽藍の諸性質(上)・(下)」(『史蹟名勝天然記念物』第18集 第8・9号 1943年)では詳細な現地調査により金堂・塔などの規模の復元、伽藍配置と規模の推定などが行われ、現在に至る研究の基礎が示された。また指定に伴う調査報告として内務省「上野国分寺跡」(『埼玉茨城群馬三県下における指定史蹟』1927年)、群馬県「上野国分寺跡」(『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1輯 1929年)があり、当時の現況が詳細に記されている。この他にも尾崎喜左雄「上野国上代寺院についての一考察」(群馬大学「史学会会報」第3輯 1949年)、石田茂作「東大寺と国分寺」(至文堂 1959年)、「上野国分寺」(『前橋市史』第1巻 1971年)、前沢和之「上野国交替実録帳 国分寺項について」(『群馬県立歴史博物館紀要』1号 1980年)、前沢・関口功一「群馬県 史蹟上野国分寺跡」(『日本考古学年報』37 1984年度版 1986年)などがある。また出土遺物については文字瓦を中心に、秋山吉次郎「国分寺址より出でし文字瓦に就いて」(『上毛及上毛人』77号 1923年)、相川龍雄「上野国分寺文字瓦譜」(1934年)、住谷修「上野古瓦文字考(上)・(中)・(下)」(『上毛及上毛人』218・219・220号 1935年)、相川「上野国分寺瓦の考察」(『考古学雑誌』第33巻第12号 1934年)、前沢「文化財レポート 史蹟上野国分寺跡出土の文字瓦について」(『日本歴史』454号 1986年)、関口「上野国分僧寺金堂基壇中出土瓦について」(『東国史論』第1号 1986年)などの報告と論考が発表されている。

上野国分寺に関するこれまでの発掘調査としては、本事業に係わるもの以外には北側の町道の拡幅に関連して南辺築垣の位置を確認するための小規模な調査が行なわれた(群馬町教育委員会『群馬町埋蔵文化財調査報告第1集 上野国分寺寺域縁辺の調査』1975年)のみである。周辺の調査としては、関越自動車道路線域の予備調査で僧寺と尼寺の中間から「東院」の墨書のある須恵器境が出土した(群馬県教育委員会『上野国分寺周辺地域発掘調査報告一僧寺・尼寺中間地域の考古学的検討』1971年)、また現状変更に伴う調査で史跡地西側の小道の西方において明らかに寺域外を示す状況が確認された(群馬県教育委員会『上野国分寺隣接地域発掘調査報告 奈良平安時代の竪穴住居跡等の調査』1979年)などがある。さらに尼寺跡の調査報告としては群馬県教育委員会『上野国分尼寺跡発掘調査報告書(昭和44年度調査概要)』(1970年)、同「同(昭和45年度調査概要)』(1971年)がある。現在報告書作成が進行中である関越自動車道路線敷地の僧寺・尼寺中間地域の調査抄報としては(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団「年報1」国分寺中間地域Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡(1982)、同「年報2」(1983)、同「年報3」(1984年)がある。

2. 昭和55年度の調査

寺域および主要伽藍の配置の確認を目的とし、全域に第1～11トレンチ（幅3m）を設定して実施した。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

- ① 第1、9トレンチのS96～101で南辺築垣（SF01）が確認された。基底幅4.8～6m、上端幅（現状）1.5mで、高さは寺域内から0.7～1.4m、寺域外から1.3m～1.8mを測り、断面は台形状を呈す。地山を削り出し、その上に粘性のある黒褐色土を積んで造っているが、版築の状況は見られない。南側に接して幅約3.6mの浅い溝（SD01）がある。築垣の北側には瓦片を包含する層があり、この上に浅間山噴出のB軽石（以後、B軽石と略す）の純層堆積が認められる。
- ② 第11トレンチの塔跡に近い位置に瓦の集積があり、W1～3では8世紀後半の竪穴住居（SJ01）が検出された。また寺域の中央部を南北に走る細長い窪地は、深さ約2mの溝状に掘られたものであることが確認され、底部から五輪塔・馬骨などが出土した。

遺物 コンテナバット200個分が出土した。その大部分は瓦であるが、奈良～平安時代の土師器・須恵器・中世土器も出土しており、特に奈良三彩片の出土したことが注目される。

発掘調査と併せて、金堂・塔跡の現況実測図（1/50）の作成、航空測量用写真の撮影を実施した。これらの成果は『史跡上野国分寺跡—寺域確認発掘調査概要—』にまとめて発表した。

3. 昭和56年度の調査

金堂周辺と東半部に第12～15トレンチ（幅3m）を設定し、検出状況に応じて拡張を行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

- ① 第5トレンチN17・E132で100×70cmで上面が平坦な石1個を検出した。これは『史蹟調査報告第二』（内務省 1927年）などに記録されている礎石と同一とみられ、道路を挟んで東側にも同様な石の存在することが確認されている。金堂中心との距離は106.8mを測る、などの点から、これを東大門西側柱列の礎石の1つと推定した。東辺築垣は金堂中心から1町の位置に当る、史跡地の東側に沿う農道に一致することが想定された。
- ② 金堂の北側～史跡地北辺の第12トレンチでは、地山を浅く掘り込み、周縁に玉石が散在する径約90cmの円形の掘形を2ヶ所検出した。これを周辺の7ヶ所の円形掘形と玉石集積とを併せて検討した結果、中央部の間口420cm、その両側が390cm、奥行は4間で330cm等間、中軸線は金堂とはほぼ一致することがわかり、これを講堂跡（SB06）と推定した。金堂とは中心—中心で4.710cmを測る。桁行の両側部分は攪乱のため検出できず、また基壇の痕跡も確認できなかった。
- ③ 塔跡東側の第11トレンチを拡張し、S9・W1で径約80cmの円形土壌内に玉石が密集してあるのを検出した。金堂の西側柱列から14.5mの位置にあり、西面回廊の礎石根石の可能性がある。
- ④ 塔跡と中軸線を挟んで東に相対する第15トレンチでは、地山が窪地状となっており、夥しい量の瓦が山積み状にあった。この中には壁土・漆喰片・木炭片が混じり、下部からは溝状の切り

込みをもつ凝灰岩切石が出土したことから、建物の部材が一括して廃棄された状況が想定された。

遺物 瓦を主に、コンテナバット110個・20kg入飼料袋497袋分がある。土器片では奈良三彩片、「福」と墨書する須恵器碗、内面に輪宝を墨書する中世の素焼きの皿、また円面鏡・瓦塔片などがある。文字瓦は300点近くあった。石造物は宝篋印塔・五輪塔など70点の出土をみた。

発掘調査に併せて、航空測量による地形図（1/200、1/500）を作成した。これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要2」にまとめて発表した。

4. 昭和57年度の調査

第16～19次調査を、寺域南東隅周辺の確認、塔基壇と西面回廊の確認を目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第16次調査は南辺築垣（S F 01）と東辺築垣との交点と推定される部分とその南側で行った。地山はS 100～101で階段状に削られ、南に向かって次第に低くなっていく。これは築垣基部の造作とみられるが、この南側は染谷川に向かって広がる谷地形となっている。この谷地の土層の中位にはB軽石の純層堆積があり、谷地の縁辺部には踏み固められた状況があって、B軽石堆積以前に改修がなされていたとみられる。以上のことからこの谷の北縁上を南辺として寺地の占定がなされたことが窺える。

② 塔跡南東側の第17次調査では、一帯に軽石混黒褐色粘質土の盛土があり、これがW12～13を境として塔跡寄りでは一段低くなっており、一面に瓦片と土器類が散布している状況が確認された。W7～10で金堂と方位を同じくする梁行2間（3.45m）の掘立柱建物（S B 09）9間分が検出され、西面回廊の一部である可能性が考えられたが、南面回廊の部分は確認できなかった。

③ 金堂跡西側の第18次調査では、S B 09の北側への延長および金堂への屈曲部は検出されなかった。N5・W7付近で2×3間の掘立柱建物（S B 08）を検出し、また塔跡の北東約23mで竪穴式住居1軒（S J 08）を検出した。金堂の西側の部分には中世に属する墓墳7基があり、国分寺廃絶後金堂周辺が墓域化していたことを窺わせる。

④ 第19次調査は塔基壇の規模と構造の確認を目的とした。この結果、基壇は一辺長1.920cm（64尺）、側柱列からの出は420cm（14尺）で、旧表土を掘り込んで版築状に盛土をし、標高129.00mを基部として角四石安山岩切石を積み上げて側面の化粧をしている。礎石上面は標高130.25～130.34mであることから、基壇の高さは120cm（4尺）前後であるとみられる。また基壇は現状では南と西に広がっているが、これは後代の堆積と明治期の盛土であり、塔院に関係する基壇ではないことが判明した。

遺物 瓦を主に、コンテナバット300個・飼料袋1,200袋分が出土し、特に塔跡付近出土の軒丸瓦の中で素弁八弁で花卉が楕円形状となるものの量の多いことが注目された。

発掘調査に併せて「史跡上野国分寺跡整備基本計画」を委託して作成した。これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要3」にまとめて発表した。

5. 昭和58年度の調査

第12トレンチ拡張・第20～23次調査を、僧房および寺域北辺部の状況確認、南大門の確認などを目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第20次調査は史跡地北部で行った。僧房については「上野国交替実録帳」金光明寺項に「萱葺僧房壹字長拾伍丈 広貳丈 高柒尺」とあり、寛仁4年(1020)には既に滅失されていたことがわかる。金堂と北辺の間で僧房推定地の調査を進めたが、調査区全体で礫混り灰色砂(地山)まで削平が進んでおり、僧房および雑舎などの遺存は認められず、奈良～平安時代の遺構としては井戸遺構1基(SE04)を確認したのみである。この地山上面には北西から南東に向かう流水の痕が認められ、その上部にはこれによる砂礫の堆積がみられた。この流水がどの時期のものであるかは明確にし難いが、包含される土器から中世～近世であるとみられ、これのために国分寺存続期の構造物が造られた表土層は流失している。

② 第21次調査は史跡地北西隅の墓地跡で、金堂中心から1町の線上(N133.9)にかかる位置で行った。ここは周辺より一段高い地形となっており、築垣の遺存することが期待されたが、地表下20cm程度で砂質土の地山となっていた。このため築垣は残存していなかったが、N130から北側が僅かに高くなり、N136から北に向って急に低くなっている状況が検出された。最終的には金堂中軸線から北側へ1町の位置で、現在道路舗装の下にあると伝えられる礎石の確認をまたねばならないが、北辺築垣は金堂中心から1町の位置にある可能性が高いと判断される。

③ 第23次調査は南大門の確認を目的として行ったが、東側妻の礎石3個と基壇、それに取りつく南辺築垣などが検出された。礎石は両側の心心距離が630cmで、南辺築垣の東半分はこの中心部に取りつく。築垣は地山を削り出した上、基部幅200cmで粘質土を1単元3～5cmで版築様に積み上げている状況が認められた。また1ヶ所のみであるが寄柱とみられる柱穴1対を検出した。この調査の結果から、(1)南大門で検出された礎石の方位は南辺築垣の方位と約4°の振れをもち、塔とほぼ同方向を示す、(2)現状の礎石による奥行きは630cm(21尺)であるが、これは「上野国交替実録帳」の記載と異なる、(3)南大門基壇は改修の行なわれた形跡があり、古い段階では南辺築垣と方向を同じくするものとみられる、(4)南辺築垣の西半部は東半部に対して北側に振れる方位をもつ可能性がある、(5)これまでの伽藍配置の想定と異なり、南大門は南辺築垣から内側に入って造られていた状況は認められない、(6)南大門の東約28mの所に方位を同じくする680×560cmで南北に長い基壇とみられる遺構がある、などの点が確認された。

遺物 瓦を主に、コンテナバット300個分以上が出土した。南大門周辺には瓦溜があり、多数の文字瓦が出土したが、この中に「郷名+姓+名」および「郷名+名」の形式で書かれたものがあり、郷名は1字に省略されたものもある。また「物部」・「大伴」などの人名、「山字」・「辛科」・「八田」など多胡郡に関係する郷名の多いことが注目された。

これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要4」にまとめて発表した。

6. 昭和59年度の調査

第23次西拉張・第15トレンチ拉張・第24～26次調査を、寺城南西隅部の遺構と南辺築垣の状況、金堂基壇の規模と構造、金堂北西方の遺構の状況の確認を目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第15トレンチ拉張調査では、昭和56年度の第15トレンチを南側に拡張して実施した。S 15-20・E 80-88で瓦溜の南半部を確認したが、これにより瓦溜は南北約11m・東西約8mの範囲に、中心部の厚さ約70cmで周辺が薄くなる山盛り状の堆積を示すことが明らかとなった。瓦片は焼土、壁土塊、漆喰片を含む暗褐色土中に乱雑な状態で積み重なるようにしてある。この中には瓦完形品、鬼瓦、塑像片、凝灰岩切片、土師器坏および内耳鍋型土器、石臼などが含まれることから、建造物の残骸を窪地に投棄したもので、その時期は中世であるとみられる。また出土遺物の内容および位置から、金堂の残骸の可能性を想定できる。このほかには、瓦溜の南側では9世紀前半の竪穴式住居1軒（S J 15）、東側約12mで北西から南東に向かう国分寺存続期の「V」型溝（S D 04）と中世の井戸遺構（S E 08）が検出された。

② 第24次調査では、S 87.6-90・E 60-64.4で南辺築垣の残部を検出したが、築土の中に含まれる土器片から、平安時代に修造の行われたことがわかる。この北側には10世紀初め頃の竪穴式住居が2軒（S J 13・14）があり、床面上に平瓦の完形品が並べられていることから、この修造に関連するものである可能性がある。またS 51-56・W 70-75で2×2間の掘立柱建物（S B 11）を検出したが、長方形の柱穴掘形をもち、東西妻側の中柱には蜂巣石が礎石状に据えられている。この建物は奈良時代に属するものである可能性がある。

③ 第25次調査では、金堂の規模は桁行が7間で柱間は11-11-12-12-12-11-11尺、梁間が4間で柱間は11-11.5-11.5（-11）尺であり、基壇の出は11尺であることを確認した。基壇は旧表土を浅く皿状に掘り込んだ上に一単元6-14cmの厚さで築土し、高さは3.5尺程度と推定できる。基壇化粧は凝灰岩切片によるとみられる。基壇上の構造物としては南側柱列の礎石が5ヶ所、身舎北側柱列中央部の礎石が3ヶ所で原位置に残り、この身舎北側の中央一間分の礎石の間に扁平な玉石が一列に並べられているのが確認された。これは本尊の背後に当たり、来迎壁の地覆石であると判断される。基壇上面と南側には多数の墓塚が造られており、下部のものは素焼き皿、上部のものは寛永通宝、煙管などを伴う。またその上部からは馬骨とともに「宝曆三年」（1753年）の墨書銘をもつ石製馬頭観音が出土している。

④ 第26次調査では、金堂の西方で土器・鉄器などを廃棄した11世紀中頃の土壇（S K 33）などが確認された。またこの付近では中世のものとみられる多数の小柱穴、土壇、井戸遺構が検出され、国分寺廃絶後に住居区域として利用された状況が認められる。

遺物 瓦を主に、コンテナバット300個以上が出土した。金堂跡周辺からは五輪塔などの石造物が多数出土している。これ以外には、塑像片、金銅製飾金具、鉄製鉸具などがある。これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要5」にまとめて発表した。

7. 昭和60年度の調査

第27～29次調査を、塔跡南側の旧地形と整地状況、遺構の確認、寺域中央部の溝状掘り込みの状況の確認、金堂跡南側の遺構と中門跡の検出を目的として行った。

遺構 確認された主な遺構の概要は次の通りである。

① 第27次調査では、塔跡の南側50～60mで7世紀末から8世紀中葉にかけての竪穴式住居（S J 16・17・24）と、それを切って造られた南北に廂をもつ2×4間の掘立柱建物（S B 12）が検出された。S B 12は、(1)柱穴は方形の比較的大きな掘形をもつ、(2)掘形の埋土中に瓦片・平安時代以降に属する土器片が混じっていない、(3)柱を抜きとった後粘質土で埋め戻している、(4)柱穴の重複は認められず1期のみ建物である、(5)8世紀中葉のS J 24は人為的に埋め戻されておりこれを切って柱穴が造られている、(6)東側柱列は塔の西側柱列の延長線とほぼ揃う位置にある、(7)東側に方位を同じくする目隠し塼状の柱列（S A 03）を伴う、などの点から、8世紀中頃に塔などの造営に関連して設けられた諸施設の内、その中心となる建物であると推定された。また塔の南側約82mの位置で南辺築垣の一部を確認したが、本体は完全に削平され基部のみが残存していた。軽石混り黒褐色粘質土を盛土した基部の上面も削平されているが、これを切って竪穴式住居2軒（S J 21・22）が造られていた。この住居が11世紀初頭から前半のものであることから、南辺築垣は11世紀初頭には既に全壊の状態であったことが明らかとなった。これは「上野国交替実録帳」に、寛仁4年（1020年）には既に築垣や南大門などが無実（滅失）となっていたと記されているのに符合するものであることに注目される。

② 南大門の南側の第28次調査では、寺域中央部にある溝状掘り込み（S D 02）の南側延長部も、寺域内と同様に後世に設けられた溝であることが明らかとなった。階段状に掘られた中央部には流水の痕が認められ、旧寺域内の滞水を染谷川に排出するための溝であると推定された。国分寺に至る参道の跡などは確認できなかった。

③ 金堂南側の第29次調査では、昭和10年代の調査で確認された中門跡と推定される礎石の確認を行った。しかし根石状遺構1ヶ所と、破砕された石片を確認したのみで、礎石および中門の存在を示す遺構は検出されず、中門の正確な位置と規模、構造を明らかにすることは困難となった。金堂の南側は表土が薄く、耕作による攪乱が地山にまで及んでいるため遺構の残存状況は悪い。ここでは縄文時代中期の竪穴式住居1軒（J S 28）、奈良時代前期の竪穴式住居（S J 25・26・27）が検出されたが、国分寺に直接関連する遺構は確認出来なかった。廃絶後の様相を窺わせるものとしては、墓塚が51基検出されたほか方形土壇などがあったが、これらの造られた時期を示す資料は得られなかった。

遺構 竪穴式住居址からの土器・瓦片などコンテナバット80個分以上が出土した。また、第29次調査では墓塚内などから、五輪塔の部分などの石造物が90点以上出土している。文字瓦は52点出土しているが、「成」は「武」を崩したもので、多胡郡武美郷を示すものであることが判明した。これらの成果は「史跡上野国分寺跡発掘調査概要6」にまとめて発表した。

IV 調査の概要

1. 目的および調査方法

目的 昭和55～60年度の調査の成果にもとづき、整備のための具体的な資料を得るために次の諸点を目的として実施した。

- ① 塔跡南側の遺構の状況の確認。
- ② 南辺築垣の位置と構造の確認。
- ③ 寺城南西外側の地形と遺構の状況の確認。
- ④ 東大門推定地東半部の状況の確認。

調査方法 基本的には昭和55～60年度と同じである。

- ① 昭和56年度まではトレンチによる調査を主とし、状況に応じてこれを拡張する方法をとり、第1～15トレンチを設定した。昭和57年度以降は発掘区域を面的にとるためトレンチの名称を廃し、「第〇次調査」と称している。
- ② トレンチ名称との混同を避けて第16次調査から始め、以後調査順に第29次調査まで実施した。
- ③ 調査基準線は国土調査法による第Ⅸ座標系 $X = +43,750.0$ 、 $Y = -72,500.0$ を基準点として、座標北より 4° 西偏させて設定した。ただし本書における方位は、国土座標によって表示している。
- ④ 各調査区域・遺構の座標値は、基準点を $(0 \cdot 0)$ とし、東・西・南・北をE・W・S・Nとして、これからの距離(m)でもって表示した。
- ⑤ 遺構の配置などの検討にあたっては1/200および1/500地形図を使用した。
- ⑥ 遺構は次の分類記号によって表示し、それぞれの遺構ごとに一連番号を付した。

SA：柱穴列など SB：建物 SD：溝・濠 SE：井戸 SF：築垣・塀 SJ：竪穴式住居 SK：土壌 ST：墓塚 SX：性格不明

Table 1 調査区の位置と目的

発掘面積 1,697 m^2

調査次	位 置	目 的	備 考
30	塔跡南側・南辺築垣西半部 S 50-59・W 41-70 S 59-65・W 60-70 S 68-88・W 31-37 S 77-83・W 46-60 S 83-96・W 46-53 S 96-109・W 50-53	創建期遺構の確認 修造用遺構の確認 南辺築垣の位置と形状の確認	調査面積 638 m^2 昭和60年度第27次調査の追加調査
31	寺城南外側西半部・30次の南側 S 91-160・E 7-10 S 112-115・E 13-W 60 S 109-170・W 37-40 S 150-153・E 10-W 55	寺城南外側の地形と遺構の確認	調査面積 946 m^2
32	史跡地東辺中央部の東外側 N 18-35・E 137-145	東大門推定地東半部の状況の確認	調査面積 113 m^2 史跡地外民有地

※昭和55～61年度の発掘調査面積は合計11,049 m^2 で、史跡地全体の17.6%となる。

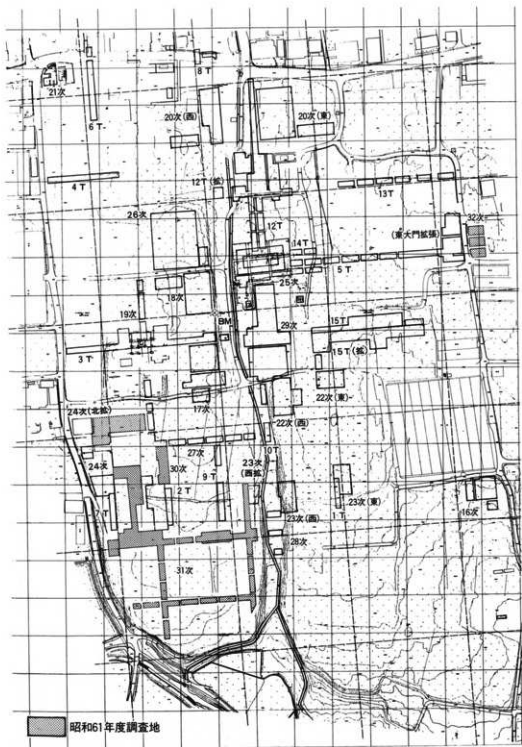


Fig. 3 遺跡全体図・トレンチおよび調査区位置図 1/2,000

2. 調査の経過

本年度の発掘調査は、昭和61年7月29日から昭和62年3月17日まで実施し、同3月18日からは出土遺物および各資料の整理を行った。以下、その経過を月ごとに略記する。

5月 これまでの調査で出土した資料の分類、復元、実測などの作業を行う。

6月 調査計画および整備事業計画の検討を行う。13日に管理部長らが史跡信濃国分寺跡などを視察。史跡地北側の水路改修工事について群馬町農政課との協議を行う。

7月 調査準備。29日より第30次調査に着手する。

8月 方形土壙（SK77）の底部から罎口の完形品1点が出土する。縄文時代中期の竪穴式住居（SJ29）、中世～近世の墓壇残痕多数が確認される。

9月 S60・W64で奈良時代前期の竪穴式住居（SJ30）1軒を検出する。またS60・W58で小型の竪穴式住居1軒（SJ31）を検出するが、東壁側に白色粘土塊があり、そこに常滑焼陶片が混じっていることから中世に属するものと判断される。S83・W50付近で奈良時代前期の竪穴式住居1軒（SJ32）、それを切る円形土壙（SK82）が検出される。

10月 S80・W50付近で不整形の掘形もつ小鍛冶跡（SK85）を検出する。円形の炉跡および焼土と灰の散布、埴埴、羽口などの出土が確認される。この東側でも同様の小鍛冶跡（SK86）が検出される。8日から第31次調査に着手する。27～30日に史跡薩摩国分寺跡の整備状況、大隅国分寺跡の発掘調査状況などを視察・調査する。

11月 第31次調査の南辺築垣外側117～120ラインで、奈良～平安時代の竪穴式住居、土壙が多数あるのが確認される。S150～153ラインでは土器片の散布はあるものの、顕著な遺構の存在は確認されない。22日に「文化財の集い」現地説明会を開催する。参加者は約250名。

12月 S112・W54で平安時代初め頃の竪穴式住居1軒（SJ34）と、それを切って造られた2間×4間の掘立柱建物（SB14）を検出する。S119・W63付近で古墳時代後期の竪穴式住居1軒（SJ35）とそれを切って造られた平安時代の竪穴式住居（SJ42・43・44）を検出する。

1月 S97・E7～10で南辺築垣（SF01）を検出し、その北側でB軽石の堆積を確認する。また南辺外溝（SD01）は中世の土壙などによる攪乱が進んでいるが、多量の瓦を含む土壙（SK96）などのあるのが確認される。14日に整備委員会幹事会議を開催する。23日より第32次調査に着手する。

2月 第31次調査の実測を行う。第32次調査では一部でB軽石の堆積と、小規模な溝の所在を検出したが、東大門とみられる遺構は確認できない。17日に整備委員会を開催する。

3月 第32次調査の実測などを行う。17日に埋め戻しおよび整地作業を終了する。調査用機材の整理、出土遺物の復原、拓本とり、実測、図面類の整理を行う。

発掘調査に並行して、見学者用の説明板の設置と「見学の手引き」の作成・配布、タメマスなどの危険物の撤去を行い、史跡に対する理解と環境の整備に努めた。修学旅行、遠足、郷土研究会、史跡探訪グループ、研究者、文化財関係者など3,600名以上の来訪者があった。

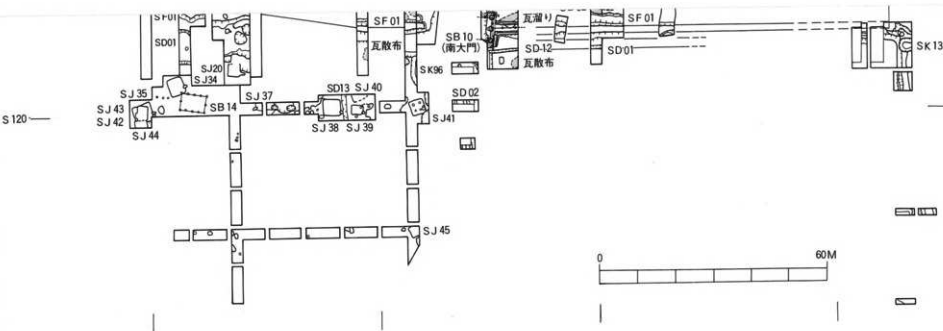


Fig. 4 史跡上野国分寺跡遺構全体図 1/1000

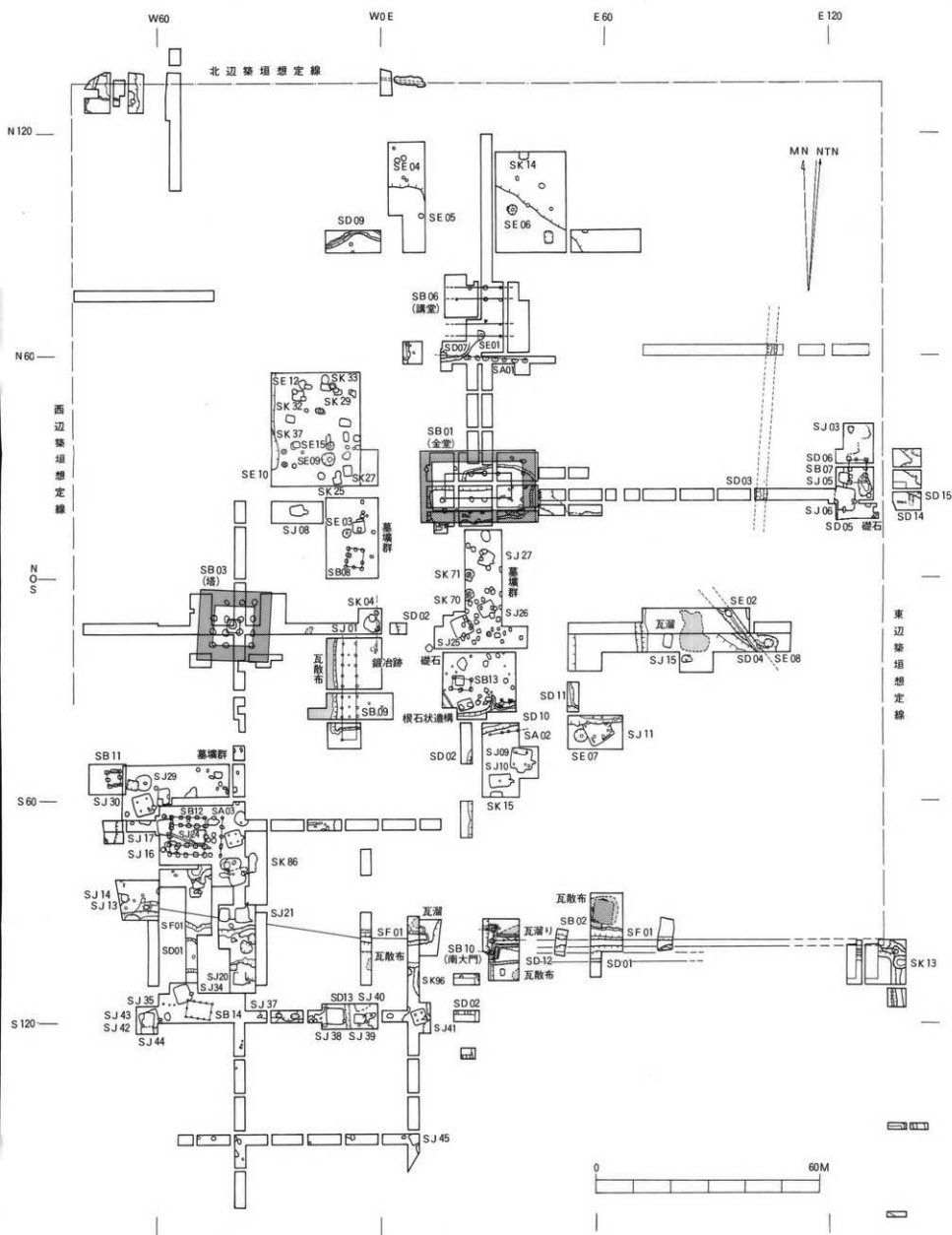


Fig. 4 史跡上野国分寺跡遺構全体図 1/1000

3. 第30次調査

(1) 遺構

寺城南西部については、昭和59年度の第24次調査で南辺築垣（S F 01）の位置と構造および修造の可能性を明らかにし、さらにその北側に造られた方形掘形をもつ2×2間の掘立柱建物1棟（S B 11）と10世紀初めの竪穴式住居2軒（S J 13・14）の所在を確認した。これによってこの付近には創建期の建物と、平安時代前期の修造に係わる施設のあることが推定された。このため昭和60年度の第27次調査では東側隣接地の調査を実施し、7世紀末から8世紀中葉にかけての竪穴式住居4軒（S J 16・17・18・24）と、それらを切って造られた方形掘形をもつ2×4間で南北両面に廂をもつ掘立柱建物（S B 12）、その東に並ぶ目隠し堀状の柱穴列（S A 03）などを検出した。S B 12は建て替えの行われた状況はみられず、また東側柱列の位置が塔の西側柱列の南への延長線上に一致することなどから、これは国分寺建立にあたって設置された造営用施設の一部であろうと判断された。また南辺築垣の北側には9世紀代の土器を伴う小鍛冶場（S K 67、S J 23）があり、さらに南辺築垣の基部を切って造られた11世紀初頭から前葉の竪穴式住居2軒（S J 21・22）が検出された。これによって南辺築垣は、11世紀初頭には既に完全に崩壊していたことが確認され、またその削平面上に浅間B軽石が堆積していたことから、その後も再建されなかったことが明らかとなった。そして南辺築垣の南縁部には、内耳鍋型土器を伴う円形土壙（S K 60）と火葬に使ったと思われる長方形の焼土壙（S K 62）が造られており、このことからこの付近は国分寺廃絶後に墓域化していたと推定された。

第30次調査は、これらの所見をうけて国分寺創建以前の状況、建立に関係する遺構、衰退期の様相の確認を目的として、第24・27次調査区を拡張する形で実施した。今回の調査で確認された土層の状況を見ると、現地表面は標高128.00～128.10mにあり、全体的に耕作による攪乱が深さ50～60cmに及んでいる。W50～70では地山の黄褐色粘質土または暗褐色粘質土が127.50～127.60mにあり、この面で遺構が検出された。W50以東ではこれが下がり、その上に縄文時代中期の土器片を含む軽石混り黒褐色粘質土が堆積するが、W35～37では127.20mで11世紀初頭の竪穴式住居の掘り込み面が確認される。この上に瓦片と土師器片を含む厚さ20cm前後の暗褐色粘質土があり、さらにその上に浅間B軽石を多量に含む暗褐色土がのる。確認された主な遺構には、北部では竪穴式住居3軒（S J 29・30・31）・土壙（S K 77・78・79・83）・井戸遺構（S E 16）・墓塚（S T 66～74）、南部では南辺築垣（S F 01）・南側外溝（S D 01）・竪穴式住居2軒（S J 32・33）・小鍛冶跡（S K 85）・土壙（S K 82）、東部では小鍛冶跡（S K 86）などがある。S J 29 S 53～57・W 62～66の黄褐色土面で検出された。南西部の一部はS K 77によって切られている。東西360×南北390cmの円形で、深さは現状で20cm前後と浅い。壁の立ち上がり角度は緩い。床面は砂質の黄褐色土中に造られており固くしまっているが、窪地部分には褐色土が堆積している。床面の中央部やや南西寄りに焼化し、黒色灰の散布が見られる部分があり、炉跡と判断されるが、炉本体は全く残存していない。周辺の壁近く上部径20cm前後の円形柱穴が9個確認

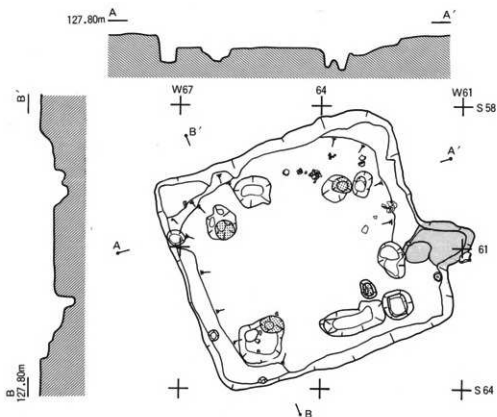


Fig. 5 S J 30 1/80

できる。遺物は床面上に土器小片が数点と北側壁沿いに石棒の欠片が1点あった以外には、覆土中に打製石斧1点と土器小片が少量含まれていたのみである。覆土は黄褐色土混りの黒褐色土を主体とし、しまっている。出土遺物から、縄文時代中期の住居と判断される。

S J 30 S 58-64・W61-67の暗黄褐色土面で検出された。検出面での規模は530×480cmで東西に長い方形を呈し、深さは現状で25-30cmである。方位はE-24°30'-Nを示す。壁の立ち上がり角度は上半部が急で下半部が緩い傾向をもつ。壁下の溝はみられない。床面は黄褐色粘質土中にあり固くしまっている。全体に平坦であるが、中央部が僅かに高くなる形状を示す。柱穴は4個あり、径50cm前後で皿状に掘り込まれた中に、底部径15cm前後、深さ30-45cmで掘られている。柱穴間の距離は2.25-2.70mで一定しない。南東隅部に35×45cmの長方形の貯蔵穴が造られているが、内部に土器などは入っていなかった。東側壁の中央部南寄りに半円形に素掘りしたカマドが設けられているが、上部は削平をうけている。覆土は暗褐色土を主体とし、北半部には黒色粘質土塊が斑点状に混じる。床面近くに土器器坏の破片が数片ある以外に、覆土中に土器小片が含まれるが、全体的に量は少ない。これらの出土遺物から、8世紀前葉の住居と判断される。第27次調査で検出されたS J 17・S J 18に引き続いて造られたもので、S J 16・S J 24と併存していたものとみられる。S J 16・S J 24が一辺300cm前後であるのに比べて大型のものであり、国

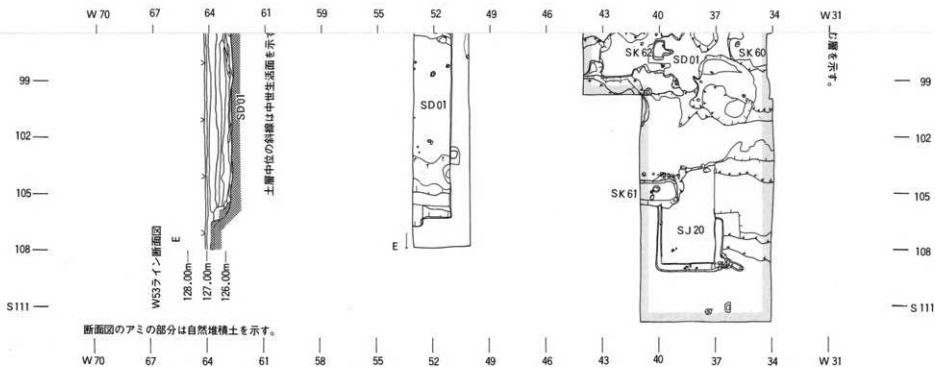


Fig. 6 第30次調査区全体図 1/200

平面図のアミで囲まれた部分は、第27次調査区を示す。

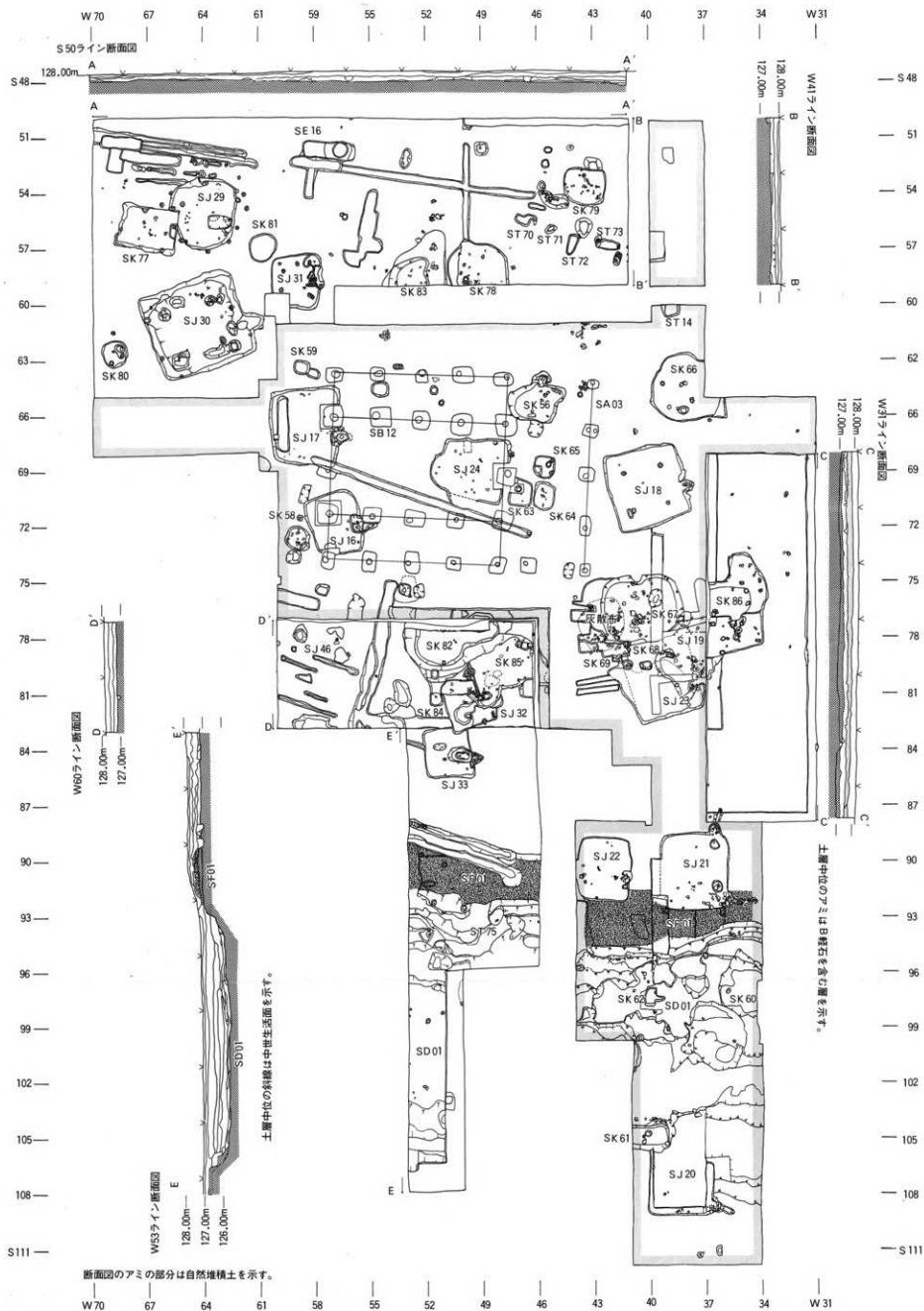


Fig. 6 第30次調査区全体図 1/200

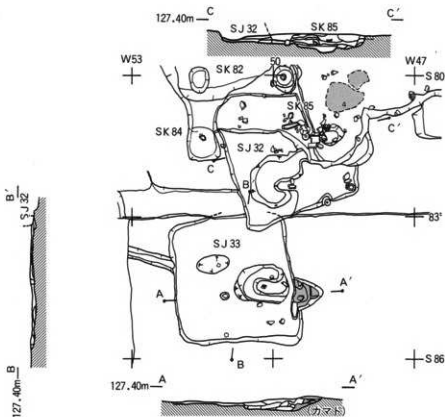


Fig. 7 S J 32・S J 33 1/80

分寺創建直前に営まれていた集落の構成を知る上で注目される。

S J 32 S 80-83・W48-51の暗黄褐色粘質土面で検出された。北東部はS K 85によって切られている。検出面での規模は東西260×南北230cm（以上）で、深さは現状で15cm前後と浅い。方位はE-19°30'-Nを示す。壁の立ち上り角度は急であり、壁下の溝はみられない。床面は暗黄褐色粘質土中に造られており、小凹凸はあるが固くしまっている。柱穴、貯蔵穴は検出できない。カマドはS K 85に切られており残存しない。遺物は南東隅の床面上および壁面中位に土師器杯の完形品があったのが目立つ程度である。覆土は黄褐色土を含む黒褐色粘質土を主体とし、しまっている。これらの出土遺物から、7世紀末頃の住居と判断される。

S J 33 S 83-86・W49-52の軽石混り黒色粘質土面で検出された。S J 32の南西に接した位置にあり、北東隅がS J 32を切った状態で造られている。検出面での規模は東西260×南北270cmの不正方形で、深さは現状で10cm前後と浅い。方位はE-10°-Nを示す。削平が進んでいるため壁の上半部は欠失しているが、下部の立ち上りの角度は緩い。壁下の溝はみられない。床面は黄褐色粘質土を含む黒褐色粘質土中に造られており、しまっている。東側壁中央部やや南寄りに半楕円形に素掘りしたカマドが造られている。内部には焼けて煉瓦状になった粘土塊と焼土、灰が入るが、石材などはみられない。またカマド手前の床面には皿状の浅い掘り込みが造られてお

り、この埋土中には焼土が斑点状に混じる。柱穴、貯蔵穴は検出されない。遺物は床面近くに土師器坏片などが散在するが、量は少ない。覆土は黒褐色粘質土を主体とし、しまっている。これらの出土遺物から、7世紀末頃の住居と判断されるが、S J 32に後出する様相を示している。S J 30などに先行するもので、第27次調査で検出されたS J 17・S J 18と並存していた可能性がある。

S K 85 S 78-82・W46-51の暗黄褐色粘質土面で検出された。S J 32の北側に接してあり、その北東部を切って造られているが、北半部はS K 82によって切られている。そのため全体規模は不明であるが、検出面で東西560cm・南北250cm以上の大きさを持ち、南面には基部幅190cm、突出距離90cmの半円形の張出しが設けられている。深さは現状で40cm前後であり、黄褐色粘質土中に底面が造られている。底面は固くしまっており、部分的に段差や皿状の浅い掘り込みがあるが、これが黒色粘質土で埋まっている。その固くしまった上面に焼土と灰の散布があることから、貼り床をした上に床面が造られていたことがわかる。張出し部の中央に上部径45cm・底部径35cm・深さ20cm前後の円筒状に素掘りされた土壇があり、上縁部は焼けて赤化していた。炉跡であり、この周辺から融解した銅が付着した増埒片と羽口片が出土していることから、銅の溶解作業が行われたものとみられる（1号炉跡）。この北西150cmにも同様の炉跡があり、周縁はよく焼けており、底部には融解した銅の付着した増埒の完形品が正立した状態で置かれるようにしてあった（2号炉跡）。炉跡は焼土を含む黄褐色土塊混り黒褐色粘質土で埋まっていた。検出面、堆積の状況からみて、この2基の炉は同時期のものと判断される。柱穴、カマドなどは確認できなかった。覆土は黄褐色土塊を含む黒褐色粘質土を主体とし、焼土、木炭を含む。全体によくしまっており、多量の土器片、瓦片、礫を含み、人為的に埋め戻された可能性が強い。1号炉周辺および炉の埋土上部には、須恵器坏片、瓦片、礫などが多数散布していた。2号炉の肩部に須恵器坏1点があり、この体部外面には「造仏」の墨書があった。検出された遺構の規模と構造からみて、S K 85が丈六仏などの製作場所であるとは考えにくい。ここが金銅仏の修理にあたった工場である可能性あるいは近辺に造仏のための施設があったことを示すものである。出土遺物から、S K 85は9世紀後葉に営まれた銅の溶融を行った工場であると判断される。

S K 86 S 73-79・W33-37の軽石混り暗褐色土面で検出された。昭和60年度の第27次調査で検出された工場跡であるS K 67などの東側に隣接してある。検出面で東西330cm以上・南北390cmの方角を呈すが、北東隅部は楕円形状となり北側へ150cmの張出しをもつ。床面は軽石混り褐色粘質土および黄褐色土中に造られており、固くしまっている。北半部に比べて南半部が僅かに高くなっているが、中央部は浅い皿状に窪んでいる。深さは現状で、南半部が20cm前後、北半部が30cm前後である。南半部の中央近くに上部径約30cmで、深さ10cmの皿状に掘られた土壇が造られており、周縁は焼けて赤化し、内部も高熱をうけた状態で固く焼きしまり暗灰色を呈している（1号炉跡）。これは炉跡であり、この南側に接して上部径約30cm、深さ約10cmの素掘りの円形土壇が、北側に接して上部径50×30cm、深さ約20cmの素掘りの円形土壇がある。この北側220cmにも上部

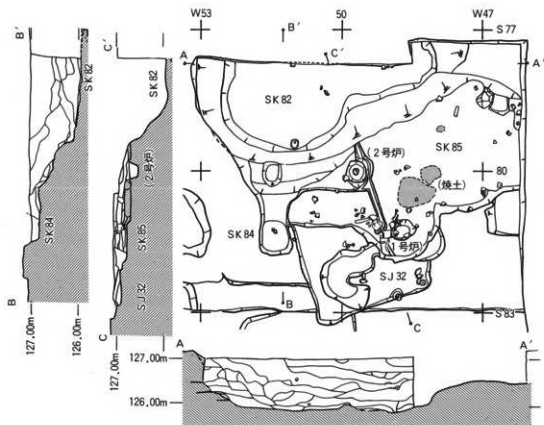


Fig. 8 SK82・SK85 1/80

径25cm・深さ5cmで浅く掘り込まれた炉跡があり、同様な状況を示している(2号炉跡)。床面には炉近辺に焼土と灰、炭の散布がみられるほか、1号炉跡を中心に融解した銅が付着した増場片と羽口、高熱をうけた痕をもつ大形の瓦片、須恵器環、礫などが散在していた。南側壁沿いに小形の穴が造られているが、柱穴と認められるものは無く、カマドも確認できなかった。覆土は軽石混り暗褐色粘質土を主体とし、よくしまっている。出土遺物からSK85と同様の9世紀後葉に営まれた工作場と判断される。第27次調査の状況と合せてみると、9世紀後半にS73~87・W35~51の範囲に竪穴式の工作場が造られ、主として銅の溶融と鑄造作業が行なわれていたことが知られる。

SK82 S77~81・W46~53の範囲にあり、黄褐色粘質土面で検出された。上部径が東西600cm・南北270cm以上の楕円形で、深さ約130cmの境状に素掘りされた土壌。SK85の北半部を切って造られている。北半部は第27次調査区域にかかるが、全容は未確認である。南側と東側に幅約60cm・長さ130cm前後の張出しがあり、この部分の斜面は階段状に造られていることから出入口であるとみられる。砂質の黄褐色土中に造られた底部は中央部が僅かに深くなっており、柱穴などは無く、遺物も瓦片と礫が数個あったのみである。埋土は黄褐色土塊混り暗褐色粘質土を主体とし、瓦片、土器小片、礫を含みよくしまっている。堆積の状況からみて、人為的に埋め戻された可能

性が強い。埋土中に含まれる土器から平安時代のもつとみられ、上限はS K85を切っていることから9世紀後葉に求めることができる。造られた目的または性格を示す資料は得られなかったが、地山の黄褐色粘質土および黄褐色砂質土を採集した跡である可能性が考えられる。

S F01 塔中心から南へ約77mのS 90～93で南辺築垣の一部を確認した。築垣の本体は完全に削平されており、基部のみが残存していた。捜査が進んでいるため地形の状況は明確でないが、S 53ラインでみると基部は自然堆積である黒褐色粘質土上に底部幅約280cm・上面幅約180cm・高さ(現状)30cmの台形状に軽石混り黒色粘質土を主体とする粘性の強い土を積み上げて造られている。この底部の標高は127.30m付近、上面は127.60m付近にある。上面は捜査をうけているが上部径約25cmの円形柱穴とみられる穴が南北縁沿いに2個ずつ検出された。南北の距離は210cmであるが、南列の間隔は160cm、北列は140cmと異なっており、W50から東側ではその延長部とみられる穴が無いため、築垣本体に伴う柱穴とは考え難い。基部の北縁は耕作溝が造られているため、原形状は損われている。南縁には基部盛土下縁に沿って幅約30cmの犬走り状の平坦部があり、その外側には地山の黄褐色土を63°(現状)で掘り込んで溝(S D01)が造られている。S D01は、W53ラインではS 94付近を北縁としS 105.6を南縁とする、約11.6mの幅をもつ。底部は地山の灰色砂土中にあり、S 96.4～99.2が僅かに低くなるが平坦である。最深部は地表下145cmにあり、標高は125.54m付近となる。南縁の立ち上り角度は急であり、その外側の検出面である軽石混り黒褐色粘質土面の標高は126.70m付近である。S D01内の堆積土中位の126.45m付近に固くしまった面があり、灰・木炭および内耳鍋型土器片の散布がみられた。この面より下には少量の瓦片・須恵器・土師器片以外の遺物の包含は確認できず、これは中世の生活面であると考えられる。

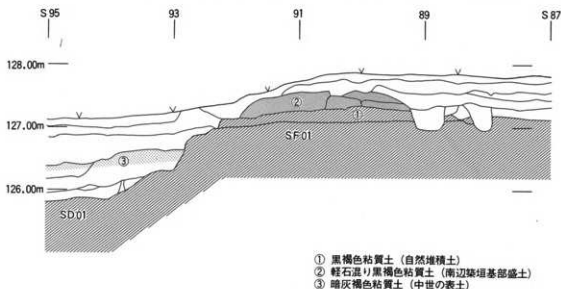


Fig. 9 S F01 W53ライン断面図 1/60

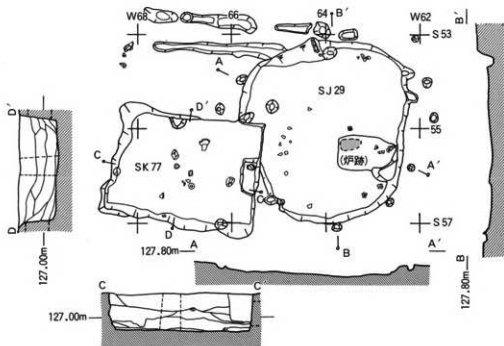


Fig. 10 S J 29・S K 77 1/80

S K 77 S 54～57・W 65～69の黄褐色土面で検出された。検出面で東西316×南北240m、深さ80cm前後の長方形土壇。壁の立ち上がり角度は垂直に近い。底部は地山の黄色砂質土中に造られており平坦である。この底面に名称不明の銅銭が1点、薄く堆積した暗褐色土上に罅口が1点横たわるようにしてあった。また黄褐色土塊混り暗褐色土を主体とする埋土中に、素焼き皿の完形品1点、石臼状石製品の部分1点が含まれていた。これらの出土遺物から中世の土壇とみられ、仏教遺物である罅口の出土が注目されるが、ほかに関連する遺物はみられず、土壇の性格・用途については不明である。

S J 31 S K 77の東南東約8m、S 57～60・W 57～60の黒褐色土面で検出された。規模は東西300×南北270cmの不正方形を呈し、深さは現状で20cm前後と浅い。方位はE-30°-Sを示す。壁の立ち上がり角度は急である。東側壁中央部に白色粘土塊が床面に壁に貼りついた状態でありこの上に常滑の壺の破片があった。床面は黄褐色土中に造られており、平坦で固くしまっている。一辺15cm前後の方形の柱穴が4個あり、柱間は東西165cm・南北185cmである。壁下の溝は無く、カマド、貯蔵穴も確認できない。覆土は黄褐色土塊混り黒褐色土を主体とし、しまりは弱い。出土遺物が少なく時期の判定は困難であるが、中世に属する住居とみられる。

以上の遺構以外に、S 57～60・W 47～54に瓦片を多く含む不正円形の土壇(S K 78・83)、瓦片と礫を含む方形土壇(S K 79)があり、これは平安時代のもものとみられる。またS 51～57・W 41～54には多数の墓塚の跡があり、伴出する土器・銅銭からこれらは中世のもものとみられる。

(2) 遺物

第30次調査区では、竪穴式住居、土塚から土器類と瓦片が出土しているが、全体的に量は少ない。地山の暗黄褐色粘質土面上に堆積する軽石混り黒褐色粘質土中には、縄文時代中期の土器片が少量包含される。S J 30ではカマド周辺に土師器杯の破片が散在していたが、完形品は1点

Table 2 S J 30出土遺物 (Fig. 11)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	成形・調整・その他	図版 番号
			口 径	底 径	高 径					
①	覆	土土師器杯	10.3	—	3.2	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。完形。	P. 1 15-1
②	覆	土土師器杯	(11.0)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。小破片。	
③	覆	土土師器杯	(12.4)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。小破片。	
④	覆	土土師器杯	(12.3)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。小破片。	
⑤	覆	土土師器杯	(11.7)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。小破片。	
⑥	覆	土土師器杯	(12.2)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。小破片。	
⑦	覆	土土師器杯	(13.3)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。小破片。	
⑧	覆	土土師器杯 (大型)	(17.1)	—	6.0	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。与程度欠損。	15-2

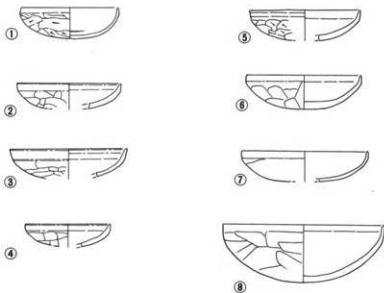


Fig. 11 S J 30出土遺物 縮尺1/4

のみであり、床面直上およびカマド内部からの出土はみられなかった。S J 30の北側にある縄文時代中期の円形竪穴式住居からは打製石斧、石棒片および少量の土器小片が出土している。S F 01の北側にあるS J 32は北半部がS K 85によって切られており、南東隅の床面上に土師器杯の完形品が2個正立した状態であった以外に、床面近くから土師器小片、⁽¹⁾ 蕨石状の玉石が数個出土している。その南側に一部が重複してあるS J 33ではカマド付近から長胴甕の上半部と土師器杯の完形品2点が出土したほかには、埋土中に土師器小片が少量含まれていたのみである。いずれの住居址も遺物の出土量は少なめである。

Table. 3 S J 32・S J 33出土遺物 (Fig. 12)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成	色 調	成形・調整・その他	図版 番号
			口 径	底 部 径	高 さ	素 地	挟 雑 物				
①	S J 32 覆土	土師器杯	12.0	—	4.1	やや粗	砂粒を含む	軟	質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。焼成前に底部内面から外面に向って穿孔。ほぼ完形。	PL 15-3
②	S J 32 床面直上	土師器杯	11.7	—	4.0	やや粗	砂粒を含む	軟	質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。完形。	15-4
③	S J 33 覆土	土師器杯	10.8	—	3.5	やや粗	砂粒を含む	軟	質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。完形。	
④	S J 33 覆土	土師器杯	11.3	—	3.2	やや粗	砂粒を含む	軟	質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。完形。	
⑤	S J 33 カマド周辺	土師器長胴甕	(22.2)	—	—	粗	砂粒を多く含む	軟	質 暗褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ、体部内面ヘラナデ。上半の破片。	

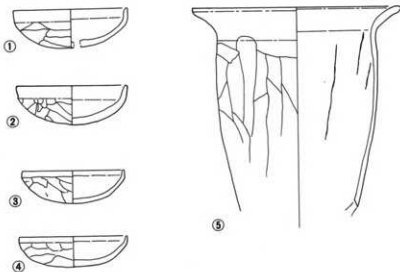


Fig 12 SJ32-SJ33出土遺物 縮尺1/4 ①・② SJ32出土 ③・④・⑤ SJ33出土

小鍛冶跡であるSK85では、円形の炉の底部に埴塙の完形品が正立して置かれた状態であったほか、炉跡周辺に須恵器環、瓦片、羽口などが集中しており、床面上には土師器環および甕の破片が多数散布していた。このうちの須恵器環の体部外面に「造仏」と墨書されたものがあるのが注目される。銅あるいは鉄製品の出土はみられなかった。

Table 4 SK85出土遺物 (Fig. 13)

番号	出土位置	種類	法量 (cm)			胎土		焼成色調	成形・調整・その他	図版番号
			口径	底部径	高さ	素地	挟雑物			
①	炉周辺	須恵器環	(13.8)	6.3	4.0	やや粗	石英、白色鉱物等を僅かに含む	やや軟質 黒灰色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り未調整。口辺りを欠く。体部外面に「造仏」の墨書あり。	PL-15-5
②	埋土	土師器 (小型甕)	(11.5)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	右回転ロクロ成形後、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ、口辺ヨコナデ。小破片。	
③	埋土	須恵器 高台付環	(14.1)	6.3	5.3		黒色鉱物を含む	やや硬質 灰白色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り付高台。多少程度残存。	
④	炉底部	埴塙	12.9	—	4.7	粗	スサを含む	やや軟質 灰白色	輪積成形後、全体にナデ。熱を受け割れが生じているが変形は少なく、内面に金様の金属微小片が付着。完形。	15-6
⑤	埋土	羽	最大径 7.0	内径 1.3	残存長 15.0	粗	スサを含む	やや軟質 灰白色	輪積成形後、全体にナデ。熱を受けて変形している。	

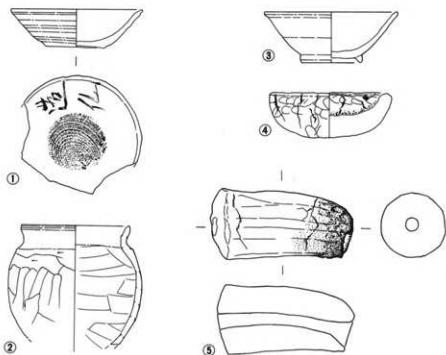


Fig. 13 SK85 出土遺物 縮尺1/4

S K 85の東側で検出された小鍛冶跡であるS K 86では、床面上および埋土下部から多数の高熱をうけた痕を持つ瓦片が出土したほか、炉の付近から羽口、埴塼などが出土している。これらは鍛冶作業用に使用されたものとみられるが、原位置からは移動した状態であった。銅あるいは鉄製品の出土はみられない。

S K 85の北部を切って造られた円形土壇であるS K 82では、埋土中位に瓦片と土師器小片が少量含まれるが、底部には礫が僅かに散布するのみである。中世以降の遺物の包含はみられない。

Table 5 S K 86出土遺物 (Fig. 14)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土	焼 成	色 調	成形・調整・その他	図版 番号
			口径	底部径	高さ					
①	埋 土	須 恵 器 高台付埴	(14.8)	8.5	6.6	粗 黒色鉱物を 多く含む	やや軟質	黒褐色	右回転ロクロ成形後、底部糸切り付高台。口辺写を欠く。	P. 1. 15-8
②	埋 土	土師器埴	(13.3)	4.8	4.2	粗 石英、雲母 細粒を多く 含む	やや軟質	黄灰色	ロクロ成形後、体部外面から底部外面にかけて不定方向ヘラケズリ、外面中位ユビアト、口辺ヨコナデ。写程度残存。	
③	炉 内	埋 埴	11.4	—	4.5	粗 スサ、砂粒 を含む	2次的に 火を受け てもろく なっている	灰 色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ。熱のためもろくなっているが数片が接合し、一部欠損するのみ。内部に金属滓が付着している。	15-9
④	炉 周	辺羽 口	最大径 7.9	内径 1.9	残存長 13.5	粗 スサを含む	2次的に 火を受け てもろく なっている	灰白色	輪積成形後、全体にナデ。数片に破砕している。金属滓の付着あり。	15-7

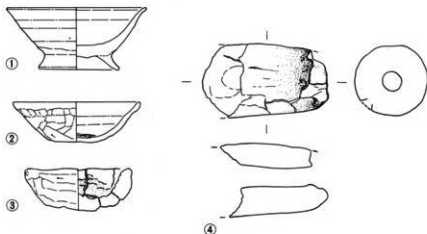


Fig. 14 SK 86 出土遺物 縮尺1/4

方形土壙であるSK77の底部に銅製鋤口が1点横に寝かせられる状態であった。下部には植物繊維の付着が認められたが、木質あるいは鉄製釘・布などの遺存はみられない。この埋土上半部からは素焼きの皿の完形品が1点と石製品の部分、洪武通宝などが出土したが、仏具とみられる遺物は鋤口のみであった。中世に属する遺構としては方形竪穴式住居とみられるS J 31があるが、この東側壁付近の白色粘土上に常滑の壺の頸部破片があった。これ以外の中世に属する遺物としては、塔跡の南方にある墓塚(S T 73)から素焼きの皿が6点と銅銭が出土しているほか、S D 01の埋土中位に形成されている生活面上から、灰・木炭の散布に混じって内耳鍋形土器1点が潰

Table. 6 SK77出土遺物 (Fig. 15)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 ・ そ の 他	図版番号
			口 径	底 部 径	高 さ	素 地	扶 雑 物			
①	底 部	鋤 口	最大径 13.8	—	厚 さ 5.0				本体銅合金に鉄製金具がつく。全体に腐食が進行し、地肌は荒れ、潰れてやや厚みも減じている。	P.L. 16-1
②	埋 土	石 製 品 (部分)	(47.0)	(36.0)	(9.0)				石臼状を呈するが、内面は条線がなく加工痕が多く残り、石臼としての要件を欠く。全体の壊程度残存。	16-2
③	埋 土	土 師 質 皿	12.0	8.0	3.2	粗	砂粒を含む	軟 質 灰白色	左回転クワ口成形後、底部糸切未調整。完形。	16-3

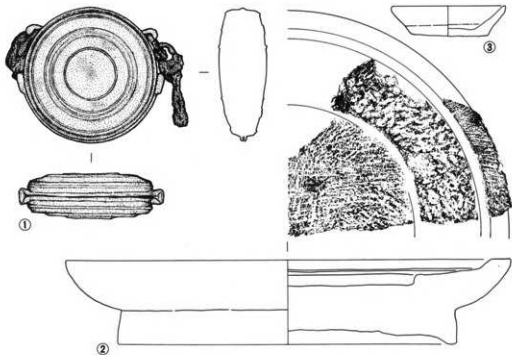


Fig. 15 SK 77 出土遺物 縮尺1/4

された状態であり、S F 01の南斜面下部に造られた墓壇内には素焼き皿が3点あった。

S D 01の底部からは瓦片に混じて須恵器、土師器片が少量出土しているが、瓦溜りなどの形成はみられなかった。これ以外には、攪乱により破壊されていた竪穴式住居のカマド跡(S J 46)から羽釜片が、塔跡南方にある浅い土壌であるS K 78・S K 73から瓦片が出土している。

Table 7 第30次調査区出土遺物 (Fig. 16)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			土 質	地 状 物	焼 成 色 調	成形・調整・その他	図版 番号
			口 径	底 径	高 径					
①	S D 01底部	須恵器鉢	横 径 3.5	13.0	2.0	やや硬	黒色灰物を 僅かに含む	硬 質 灰 色	右面転ロタロ成形後、頂部をヘラケズリし、隅みを付す。口辺 片を欠く。	PL 16-4
②	S D 01底部	須恵器鉢	(13.0)	(8.4)	—	やや硬	石質、黒色 灰物を僅か に含む	やや硬質 灰白色	右面転ロタロ成形後、へらこ し小破片。	
③	S D 01底部	土師器鉢	(16.6)	—	(3.8)	やや硬	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪轆成形後、外部外面ヘラケズ リ。内部ナデ。口辺ロコナデ。 片程度残存。	16-B
④	W50-51 S 90-98 S D 01層土	内耳鍋型 土 器	(29.0)	—	—	粗	砂粒を含む	やや軟質 外面黒色、 断面黄褐色	輪轆成形後、全体にナデが及ぶ。 底面及び縁部片を欠く。	16-B
⑤	S T 73内	土師質小皿	7.0	5.2	2.3	粗	砂粒を含む	軟 質 黄灰色	左面転ロタロ成形後、底部未切 未調整。ほぼ完整。	
⑥	S T 73内	土師質小皿	7.6	4.5	2.0	粗	砂粒を含む	軟 質 黄灰色	左面転ロタロ成形後、底部未切 未調整。ほぼ完整。	16-6
⑦	S T 73内	土師質小皿	7.7	6.0	2.2	粗	砂粒を含む	軟 質 黄灰色	左面転ロタロ成形後、底部未切 未調整。ほぼ完整。	
⑧	S T 73内	土師質皿	10.8	5.8	3.0	粗	砂粒を含む	軟 質 黄灰色	左面転ロタロ成形後、底部未切 未調整。完整。	
⑨	S T 73内	土師質皿	10.4	5.4	3.2	粗	砂粒を含む	軟 質 黄灰色	左面転ロタロ成形後、底部未切 未調整。完整。	16-7
⑩	S T 73内	土師質皿	12.8	7.6	3.6	粗	砂粒を含む	軟 質 黄灰色	左面転ロタロ成形後、底部未切 未調整。片程度残存。	

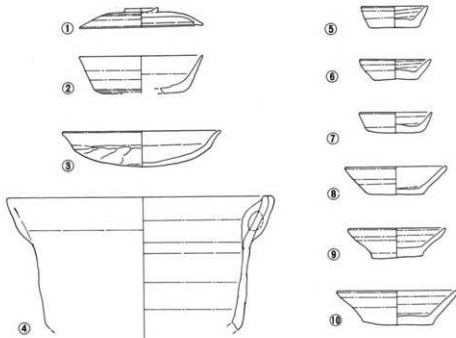


Fig. 16 第30次調査区出土遺物 縮尺1/4

4. 第31次調査

(1) 遺構

寺域周辺隣接地については、昭和49年(1974)に町道改修に伴い北側の一部、昭和52年(1977)から同54年(1979)にかけて移転家屋の建築に伴い西側の一部で発掘調査が行われてきた。また本事業の一環として、第1・2・7・9トレンチ調査、第16・23・27・28次調査で南辺築垣の確認と併せて、南側の各部で発掘調査を行った。これによって北側では流水によって旧表土、遺構が失われていたが、西側では金堂中心からほぼ1町(108~109m)の位置を境として、外側には中近世の陶器・石製品を伴う溝があり、寺域外の様相を示していることが確認された。南側については、南東隅部では南に向かって谷が広がっていること、南大門付近では南辺外溝の南側でも旧地表面が高く瓦片の散布がみられることなどが確認された。

今回の調査は、史跡地が南辺築垣の南側約80mまで広がりを持つため、この内の公有地化された西半部について幅3mのトレンチを「井」型に設けて発掘調査し、必要な部分では拡張を行って実施した。この結果、S109~123で堅穴式住居10軒(SJ34・35・37~44)、掘立柱建物1棟(SB14)、土壌多数(SK89~100他)、溝1条(SD13)が検出されたが、S123~170では顕著な遺構としては堅穴式住居1軒(SJ45)を確認したのみである。土層の状況は、E10ラインで見ると自然堆積のよくなった軽石混り暗黄褐色粘質土面がS113で126.30m付近にあり、これより上層は暗褐色土を主体とするが、耕作による攪乱をうけている。この暗黄褐色粘質土はS140で126.20m、S160で125.70mと、南に進むに従って少しずつ下がっている。W40ラインでは、自然堆積のよくなった黄褐色粘質土面がS113で126.70mにあり、これより上層は同様に攪乱が進んでいる。この黄褐色粘質土はS123~146では窪地状に低くなっており、この上に縄文時代中期の土器片を含む軽石混り黒褐色粘質土が堆積する。この上面に自然堆積の軽石混り暗黄褐色粘質土が厚さ約20cmで堆積する。S170では自然堆積の黄褐色土が126.00m付近にあり、その上層は耕作による攪乱をうけている。ここでも自然堆積層は南に向かって少しずつ低くなっており、また全体的に西から東に向かって僅かに下がる状況を示している。

SJ41 S116~121・E8~12の暗黄褐色粘質土面で検出された。検出面での規模は400×440cmで南北に長い方形を呈し、深さは現状で20cm前後である。方位はE-19°30'-Nを示す。壁の立ち上り角度は急であり、壁下には上部幅6~10cm前後(北側のみ約30cm)、深さ5cm前後の溝がある。床面は小梅大の軽石を含む暗黄褐色土で固くしまっており、平坦である。柱穴は4個あり、上部径40~50cm・底部径12~30cm・深さ50cm前後の上部がラッパ状に開く円形で、柱痕は確認できないが、柱穴間の距離は東西195cm、南北195cmと215cmである。貯蔵穴は検出されなかった。東側壁の中央部やや南寄りに地山を素掘りしたカマドが造られている。焚口袖は土師器甕と自然石を芯材として造り、皿状に浅く窪んだ焚口中央には自然石を立てた支石が置かれている。先端部は後世の掘り込みによって破壊されており、上半部も残存していない。カマド手前を中心に床面上には土師器坏と甕の破片が多量に散布していた。覆土は黄褐色土塊を含む黒褐色粘質土を主

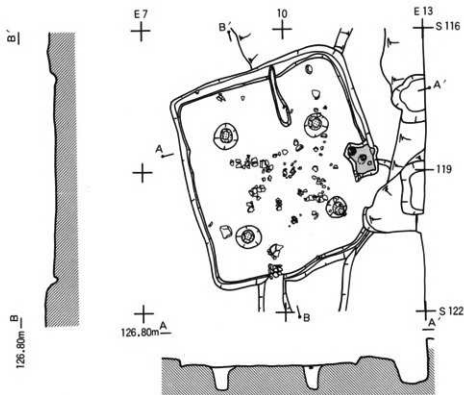


Fig. 18 S J 41 1/80

体とし、ややしまっている。出土遺物から、6世紀前葉の住居と判断される。

S J 35 S 116-122・W60-66の黒褐色粘質土面で検出された。中央部から南辺にかけて大部分が新しい住居S J 43などに切られており、東・西辺部も新しい土壌や耕作溝による破損が著しい。検出面での規模は530×490cmで東西に長い方形を呈し、検出面からの深さは25cm前後である。方位はE-32°30'-Nを示す。壁の立ち上がり角度は急である。床面は暗灰褐色粘質土中にあり、平坦で固くしまっている。壁下の溝・柱穴および貯蔵穴は確認できなかった。東側壁の中央部南寄りに素掘りのカマドが設けられているが、攪乱が著しい。この手前床面上にはカマド焚口の構築材とみられる砂岩切石や、土師器の坏・甕の破片が散布している。覆土はカマド近くでは焼土混り暗褐色粘質土、それ以外の部分では軽石混り黒褐色粘質土を主体とし、よくしまっている。出土遺物から6世紀前葉の住居と判断され、S J 41と併存していたものとみられる。

S J 45 S 150-154・E 7-10の黄褐色土面で検出された。東辺部は後世の掘り込みによって破壊されている。検出面での規模は東西300cm（以上）×南北320cmで、深さは現状で15cm前後である。方位はE-30°30'-Nを示す。壁の立ち上がり角度は急である。壁下の溝は検出されない。床面は黄褐色粘質土中にあり、中央部が僅かに高くなり固くしまっているのに対し、壁近くは低くしまりもやや弱い状態となっている。柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。カマドは失われているが、床面の南東部に焼土の散布があることから、東側壁の中央部南寄りに造られていたものと

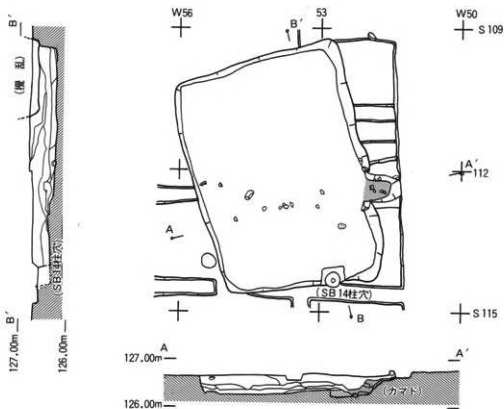


Fig. 19 S J 34 1/80

みられる。床面上に土師器環などが少量散布していた。覆土は黄褐色土を含む暗褐色粘質土を主体とし、しまっている。出土遺物から、7世紀前葉の住居と判断される。

S J 34 S 109-114・W51-56の軽石混り黒褐色粘質土面で検出された。検出面での規模は360×500cmで南北に長い方形を呈し、東側が僅かに広くなる形状である。深さは現状で50cm前後で、壁の立ち上がり角度は急である。壁下の溝、柱穴、貯蔵穴は検出されない。方位はE-21°30'-Nを示す。床面は黄褐色土中に造られ、黒灰褐色粘質土が厚さ10cm前後で貼られており、固くしまっている。カマド手前の部分が5cm程高く造られている以外は平坦である。東側壁の中央部南寄りに、半楕円形に素掘りされたカマドが設けられているが、上半部は削平されている。カマドは東側壁に対して、やや南へ傾く方向で造られている。焚口の両袖には砂岩切石を立てており、また皿状に掘り窪められた焚口底部にも同様の切石が落ち込むようにしてあった。カマド焚口の内部と床面に土師器坏片などが少量散布していた以外には、顕著な遺物の出土はみられなかった。覆土は軽石混り黒褐色粘質土を主体とし、よくしまっている。出土遺物から9世紀前葉の住居と判断される。

SB 14 S 114-119・W45-53の黒褐色粘質土面で掘立柱建物1棟が検出された。検出面は標高126.60m付近となる。2×4間の東西棟で、規模は380×765cm(13×26尺)である。柱間は桁行

が東側列で190cm等間、西側列で南から170—190cm、梁間は南側列が西から190—180—205—190cm、北側列が西から180—210—180—195cmと一定しない。方位はE—1°30′—S (N—1°30′—E)を示す。柱穴掘形は径30—35cmの円形で、深さは20—40cmである。埋土は暗褐色粘質土または軽石混り黒褐色粘質土で粘性があり、よくしまっている。柱穴の中央部に径15cm前後の柱痕が認められるが、この中には黄褐色土を含む暗褐色土が入っており、しまりは弱い状態である。これらの中には土器、瓦片などは含まれていない。北西隅の柱穴がS J 34の覆土を掘り込んで造られていることから、9世紀前葉以降のものであることがわかるが、下限については不明である。S B 14の西方にも径30cm前後の円形柱穴とみられるものが6個検出されているが、建物としてのまともさは確認できない。現在のところ、寺城南外側で検出された掘立柱建物はS B 14の1棟のみである。

S J 38 S 116—121・W10—14の黄褐色粘質土面で検出された。検出面での規模は390×445cm前後で南北に長い方形を呈し、深さは現状で25cm前後である。方位はE—2°30′—Nを示す。壁の立ち上がり角度は緩めであり、壁下の溝は検出されない。床面は黄灰砂質土中に造られており平坦であるがしまりは弱めである。床面中央部に、一辺20cm前後の不正方形で、深さ20—25cmに掘られた柱穴とみられる穴が3個検出された。この間隔は、東西・南北とも150cmである。東側の

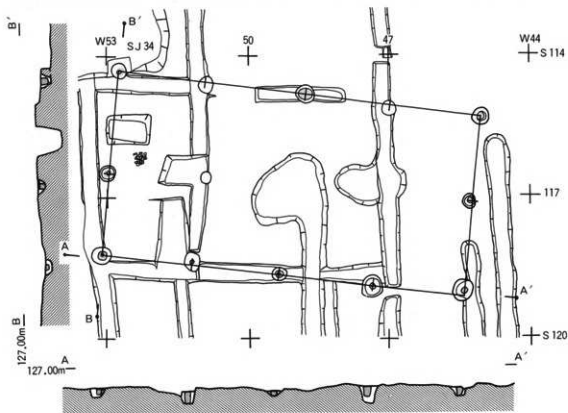


Fig. 20 S B 14 1/80 柱穴中のアミは柱痕を示す。

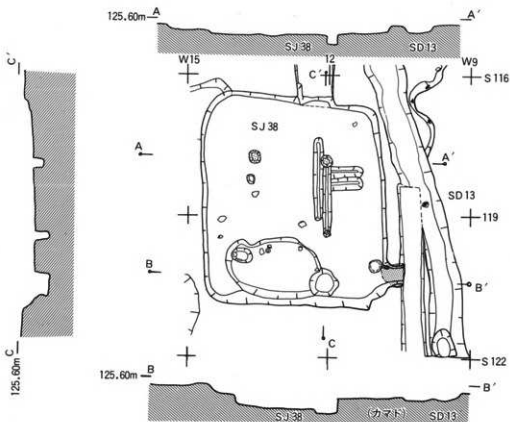


Fig. 21 S J 38・S D 13 1/80

柱穴の間には、上部幅20cm・底部幅6cm前後、深さ3cm前後の溝状の窪みがあり、間仕切りの地覆材の痕であるとみられる。この付近にはこれの西側に平行して1条、直交する形で2条、同様の溝状の窪みがある。また南側壁沿いに、上部径60cm・底部径45cm、深さ30cmの貯蔵穴とみられる不正円形の穴があり、これの西側に接して東西215×南北130cmの楕円形の土壌が造られている。東側壁の南端近くに地山を素掘りしたカマドが設けられているが、先端部は耕作溝によって破壊されており、上半部も削平をうけている。焚口は浅く皿状に掘られており、内部には焼土が多く入り、側壁面も焼けて赤化していた。カマドの手前北側の床面が、直径約30cmのドーナツ状に焼け、その内部は強火をうけたように灰色化し固くなっていた。第30次調査で検出されたS K 86の炉跡に類似しており、ここにも炉が設置されていた可能性がある。覆土は黄褐色土混り暗褐色粘質土を主体とし、ややしまっている。遺物は床面上に瓦片が少量散布する以外は、南側壁沿いの土壌内に瓦片と土師器片が数点あったのみである。これらによって住居の年代を決めることは困難であるが、10世紀代のものである可能性が強い。

S J 38付近には、この他に南西隅にカマドをもつS J 37、南東隅にカマドをもち床面上から刀子状鉄製品などが出土したS J 39、床面から大形平瓦が出土したS J 40がある。いずれも残存状態は悪いが、10世紀前後のものであるとみられる。また一部がS J 38のカマドによって切られる、

上部幅70cm前後・底部幅40～50cm・深さ15cm前後の「U」型に掘られた、方位N-20°30'-Wを示す南北溝（SD13）がある。

S F 01 昭和59年度調査の第23次西扯張調査区の西側に隣接し、南大門東側柱礎石列から西へ19.6～22.6mにあたるE7～10・S95～99の位置で南辺築垣の一部を確認した。築垣の本体は完全に削平されているが、基部の造成と寺域内の瓦の散布状況を知ることができた。これをE10ラインで見ると、地山である固くしまった軽石混り暗褐色粘質土が標高125.50m付近にあり、この上面が北から南に向かって下がるように低い階段状に削られている。この上に粘性が強くよくしまった軽石混り暗褐色粘質土と黒褐色粘質土が、底部幅300cm・上部幅200cm・高さ70～85cm（現状）の台形状に盛土されており、現状での上面は127.30m付近にある。基部の南縁の傾斜角度は盛土部分が54°と急であるが、南辺外溝（SD01）の北岸となる地山部分は約20°と緩い形状となっている。北縁の傾斜は49°を示し、これに沿って多量の瓦片が散布していた。この瓦の散布状況から、国分寺存続期の地表面は軽石混りの黒褐色粘質土であることがわかる。この上面はよくしまっており、標高126.80～127.00mにある。この上部の堆積土中の127.15m付近に、浅間B軽石の純層のあるのが認められた。厚さ約8cmで、この中には厚さ1cm前後で灰色灰の層が含まれている。軽石層は築垣に向かって次第に上っていく形状を示すが、SF01上部では攪乱のためか残存していない。基部盛土中には局部的に瓦片が含まれおり、その中には偏行唐草文で外面を黒色処理した創建期の軒平瓦があった。SD01は現状で底部幅約320cmであり、瓦片が多量に散布しているが、青磁片・獣骨なども含まれており、後世に改変をうけた可能性がある。この南岸に接して瓦片を多量に含む円形土壌（SK96）などが造られている。

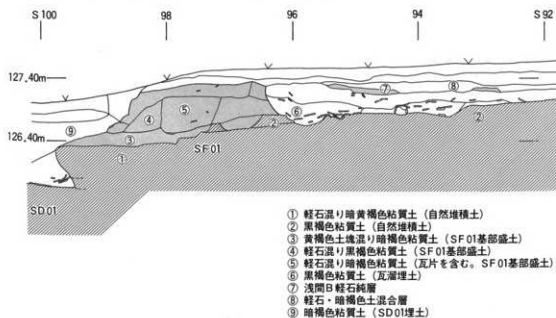


Fig. 22 SF01 E7ライン断面図 1/60

(2) 遺物

南辺築垣 (S F 01) の周辺から夥しい量の瓦片と、竪穴式住居から土器片の出土をみたほか、地山の軽石混り黄褐色土上に堆積した軽石混り黒褐色粘質土中から縄文時代中期の土器片が出土している。

古墳時代後期の竪穴式住居である S J 35 のカマド周辺には、多数の土器器片と瓦片が散布しており、同時期の S J 41 では床面の全面に土器器片と瓦の片が散布していた。またカマドの焚口

Table. 8 S J 35・S J 41 出土遺物 (Fig. 23)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土	焼 成 色 調	成形・調整・その他	図版番号
			口 径	底部径	高 さ				
①	S J 35 覆土	土器器片	(11.1)	—	(6.3)	やや密 砂粒を含む	やや硬質 赤褐色	輪積成形後、底部外面へラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ミガキ。放射状暗文が残る。小破片。	PL. 17-4
②	S J 41 覆土	土器器片	(12.4)	—	(4.5)	やや粗 砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、底部外面へラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。写程度残存。	17-3
③	S J 41 覆土	土器器片	(10.4)	—	(3.5)	やや粗 砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、底部外面へラケズリ、口辺ヨコナデ、内面ナデ。写程度残存。	
④	S J 41 覆土	土器器片	(11.4)	—	(4.1)	やや粗 砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、底部外面へラケズリ、口辺ヨコナデ、小破片。	
⑤	S J 41 床面直上	土器器片	(21.1)	—	(11.8)	やや粗 砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、外面体部以下へラケズリ、口辺ヨコナデ、内面へラナデ。内面底部より外面に向って36の穿孔が行なわれるが、うち4は貫通していない。写程度残存。	17-1

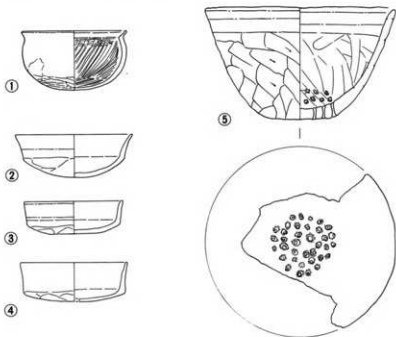


Fig. 23 S J 35・S J 41 出土遺物 縮尺1/4 ① S J 35 出土 ②～⑤ S J 41 出土

袖には堯を立てて使っており、この周辺からは甑の破片が出土している。

9世紀前葉の竪穴式住居であるS J 34ではカマド付近に土師器環の小片が少量ある以外には、床面上に同じく小片が少量散布するのみであった。7世紀後葉の竪穴式住居であるS J 45では、床面上に土師器環の完形品と破片の散布がみられた。10世紀代のもつとみられる竪穴式住居S J 37・S J 38・S J 39・S J 40では、カマド周辺に瓦片と土師器環の散布がみられたほか、S J 37では扁平玉石と人頭大礫が多量にあり、S J 39では床面上に刀子とみられる鉄製品と土器底部の転用である紡錘車とがあった。S J 38では南側壁近くに設けられた楕円形土壇の内部に土師器環および破片が入っており、S J 40の床面上には平瓦の大形片が凹面を上にしてあった。S J 38と

Table. 9 S J 34・S J 45出土遺物 (Fig. 24)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成形・調整・その他	図版番号
			口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雜 物			
①	S J 34	覆土土師器環	(15.7)	—	(3.8)	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、体部外面以下ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。小破片。	P.L. 17-7
②	S J 45	土師器環 床面直上	11.1	—	3.6	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。ほぼ完形。	17-5
③	S J 45	土師器環 覆土	11.6	—	3.8	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。ほぼ完形。	17-6
④	S J 45	土師器環 床面直上	(9.6)	—	—	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。小破片。	
⑤	S J 45	土師器環 床面直上	(12.6)	—	(3.6)	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。写程度残存。	
⑥	S J 45	土師器環 床面直上	12.0	—	3.6	やや粗	砂粒を含む	やや軟質 赤褐色	輪積成形後、体部外面ヘラケズリ、口辺ヨコナデ。ほぼ完形。	

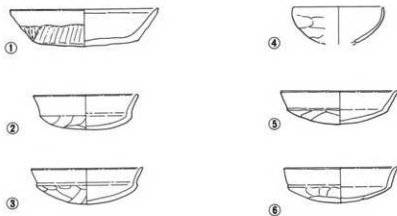


Fig. 24 S J 34・S J 45出土遺物 縮尺1/4 ① S J 34出土 ②～⑥ S J 45出土

S J 39の間にある小溝 S D 13の底部からは軒丸瓦が2点出土し、S 39の東側の浅い窪地に堆積する軽石混り黒褐色粘質土には多量の瓦片が含まれていた。

S F 01の北側には浅間 B 軽石の純層堆積があり、その下部の旧表土である暗褐色粘質土中には瓦片が含まれ、その下面には完形品を含む多量の瓦片が密集して入る瓦溜が形成されていた。また南辺外溝の S D 01の底部には瓦片が多量に散布し、その中には青磁片も含まれていた。その南側の大規模な円形土壌である S K 96の内部にも完形品を含む多量の瓦片が入っていた。これらの瓦は南大門と築垣に使用されていたものとみられるが、崩落の原状を留める状態は認められなかった。

Table.10 S J 37・S J 38・S J 39出土遺物 (Fig. 25)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成形・調整・その他	図版番号	
			口 径	底 部 径	高 さ	素 地	扶 雑 物				
①	S J 37	土師質小皿	8.0	4.8	1.5	粗	白色磁物を僅かに含む	やや軟質	灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未調整。完形。	
②	S J 38	土師器杯	(11.1)	—	—	粗	白色磁物を僅かに含む	やや軟質	灰白色	ロクロ成形。口辺小破片。	
③	S J 39	土師質小皿	(8.6)	(4.8)	(1.9)	粗	白色磁物を僅かに含む	軟 質	灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未調整。口辺小破片。	
④	S J 39	土師質土器 底部転用 紡錘車	—	4.8	現在高 0.9	粗	白色磁物を僅かに含む	軟 質	灰白色	右回転ロクロ成形後、底部未調整の小皿様の土器底部を、内→外に向けて穿孔し転用。	P.L. 17-8
⑤	S J 39	鉄製品	最大長 5.6	最大幅 3.8	厚 度 0.7					用途不詳。	
⑥	S J 39	鉄製品	最大長 17.2	最大幅 2.3	厚 度 0.7					刀子か。4片に折損。	17-9

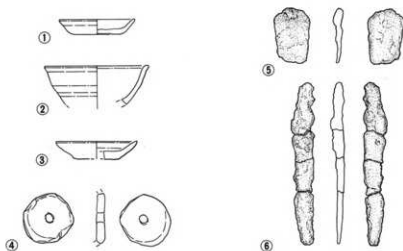


Fig. 25 SJ37・SJ38・SJ39出土遺物 縮尺1/4 ①SJ37出土 ②SJ38出土 ③～⑥SJ39出土

Table.11 第31次調査区出土軒丸瓦 (Fig.26)

番号	出土位置	胎土	焼成	色調	成形・調整・その他	図版番号
①	31 次 S D 01	表地はやや粗く黒色 灰雑物を多く含む	硬質	外面・断面とも 灰白色	范に瓦当部をおき丸瓦を はめ込んでつくる。接合 部分には布目が残り、瓦 当部宛存。	F.11 19-1
②	31 次 S K 96	表地は粗く石英・黒色 灰雑物を多く含む	硬質	外面灰色、断面 暗褐色	范に瓦当部をおき丸瓦を おいてつくる。瓦当部 裏面は布目が残り、端部 はケズリで整える。瓦 当部宛存。	19-2
③	31 次 S K 96	表地はやや粗く黒色 灰雑物を多く含む	硬質	外面灰白色、断 面灰白色	范に瓦当部をおき、先 に支持土を付加してつ くる。瓦当部裏面には 布目が残り、端部はケ ズリで整える。瓦当部 宛存。	19-3
④	31 次 S D 01	表地は粗く、石英・ 白色灰雑物を多く含 む	硬質	外面・断面とも 暗灰色、断面 灰白色	范に瓦当部をおき丸瓦 を貼付しているらしい。 瓦当部裏面、端部に有 る布目が裏取りで、瓦 当部表面に范離れをよく する砂をまぶしてい る。瓦当部小破片。	19-4
⑤	31 次 B 群石層下 瓦	表地は粗く、石英・ 褐色灰雑物を多く含 む	硬質	外面・断面とも 黄灰色、瓦当部 暗灰色	范に瓦当部をおき、半 截された丸瓦を貼付し 、外した後端部を付す。 瓦当部裏面のみ布目が 残る。瓦当部小破片。	19-5
⑥	31 次 B 群石層下 瓦	表地はやや粗く石英 ・黒色灰雑物粒を多 く含む	硬質	外面・断面とも 灰色	范に瓦当部をおき、裏 面に溝をつくり丸瓦を きき込み支持土を充て てつくる。瓦当部裏面 はエビナ。瓦当部小破 片。	19-6
⑦	31 次 E 94-95 E 9-10 瓦敷部	表地は粗く石英を多 く含む	硬質	外面・断面とも 黄灰色、瓦当部 暗灰色	瓦当部裏面に布目が残 る。瓦当部小破片。	19-7
⑧	31 次 S D 01	表地は粗く石英大粒 を含む	硬質	外面黄灰色、断 面赤褐色	范を瓦当部におき丸瓦 と一体の塊状で接合し ているように見える。 断面はややレンズ状を 呈する。瓦当部裏面に 布目が残る。瓦当部 宛存。	19-8
⑨	31 次 B 群石層下 瓦	表地はやや粗く白色 灰雑物粒を多く含む	硬質	外面・断面とし て暗灰色	范に瓦当部をおき丸瓦 を貼付している。断面 はよく丸く、裏面はま まきき込まれてレンズ 状を呈する。他の塊が 欠けた部分が欠けた 部分に布目が欠けた 部分にあたるものと思 われるが判別不能。瓦 当部宛存。	19-9
⑩	31 次 S D 13	表地は粗く石英・白 色灰雑物を多く含む	硬質	外面灰白色、断 面赤褐色	范に瓦当部をおき、丸 瓦と一体化させた部分 を接着してつくる。瓦 当部裏面に布目が残る。 瓦当部小破片。	19-10
⑪	31 次 S 92-95 E 7-10 層	表地は粗く石英・白 色灰雑物を多く含む	硬質	外面・断面とも 灰白色、瓦当部 暗灰色	裏面に布目が残る。端 部に深くエビナあり。 ⑦と同様。瓦当部小破 片。	19-11
⑫	30 次 S K 82埋土	表地は粗く石英・黒 色灰雑物粒を含む	硬質	外面・断面とも 暗灰色	范に瓦当部をおき、丸 瓦をかきかき込むよう につくる。瓦当部裏面 に布目を付加した後下 半の端部を裏取り。 瓦当部宛存。	19-12

Table.12 第31次調査区出土軒平瓦 (Fig.27)

番号	出土位置	胎土	焼成	色調	成形・調整・その他	図版番号
①	31 次 S 105-108 E 7-8 層	表地はやや粗く、石 英・白色灰雑物を多 く含む	硬質	外面・断面とも 灰白色	輪轆き造り、縄叩き の平瓦の広端に粘土を 付加して、階段き三 重瓦文をつくる。	F.11 20-1
②	31 次 (遺構不明)	表地はやや粗く石 英・白色灰雑物を多 く含む	硬質	外面断面とも灰 白色	輪轆き造り、全体を ヘラズリする平瓦の 広端に粘土を付加し て、階段き三重瓦文 をつくる。瓦当部 宛存。	20-2
③	31 次 S F 01墓 瓦	表地はやや粗く白色 灰雑物粒を多く含む	硬質	外面黒色・断面 黄褐色	輪轆き造り、縄叩き をケズリする平瓦の 広端に粘土を付加し 、范をあてつくる。 瓦当部に范離れを よくするための砂を まぶしている。瓦当 部小破片。	20-3
④	31 次 S 105-108 E 7-8 瓦	表地は粗く石英・白 色灰雑物を多く含 む	硬質	外面・断面とも 灰色	一枚造り(?)の平瓦 の広端をふくらませて 付加してつくる。瓦 当部に一部范離れを よくするための砂を まぶしている。瓦当 部宛存。	20-3
⑤	31 次 S 107-108 E 7-8 瓦	表地は粗く石英・黒 色灰雑物を多く含む	硬質	外面・断面とも 灰色	輪轆き造りの平瓦の 広端に粘土を付加し て瓦当部をつくる。 全体の同程度残存。	20-4
⑥	31 次 B 群石層下 瓦	表地は粗く白色灰 雑物を多く含む	硬質	暗灰色	平瓦部中央、范上 に3本の魚尾状粘土 を貼付し、平瓦を貼 付したあと支持土を 下して全体にヨコ コナする。瓦当部 小破片。	20-5
⑦	31 次 B 群石層下 瓦	表地はやや粗く白色 灰雑物粒を多く含む	硬質	外面赤褐色、断 面灰色	輪轆き造り平瓦の 広端を、溝を彫って 范上においた瓦当部 にきき込みつくる。 瓦当部宛存。	20-5
⑧	31 次 B 群石層下 瓦	表地は粗く白色灰 雑物、片岩粒を含む	硬質	外面・断面とも 灰色	輪轆き造り平瓦の 広端内面に粘土を 付加し瓦当部をつ くる。	20-5
⑨	31 次 S D 01	表地は粗く白色灰 雑物を多く含む	硬質	外面・断面とも 灰色	一枚造り平瓦の広 端内面を若干折り 返し、范上におい た瓦当部を付加し てつくる。瓦当部 宛存。	20-6
⑩	31 次 B 群石層下 瓦	表地は粗く白色灰 雑物を多く含む	硬質	外面・断面とも 灰白色	一枚造り(?)の平 瓦の広端内面に粘 土を巻きつけて范 に押圧してつくる。 瓦当部小破片。	20-7
⑪	31 次 S K 94 埋土層上	表地は粗く石英・ 白色灰雑物を多 く含む	硬質	外面・断面とも 灰白色	平瓦広端部内面に 粘土を巻きつけて 范に押圧してつ くる。瓦当部宛存。	20-8
⑫	31 次 S K 96	表地は粗く黒色灰 雑物を多く含む	硬質	外面・断面とも 灰白色	一枚造り平瓦の広 端を、范上におい た瓦当部にきき込 ませるようにして つくる。瓦当部 宛存。	20-9
⑬	32 次 N 27-28 E 143-143 地山層上	表地はやや粗く石 英・片岩粒を多く 含む	硬質	外面・断面とも 赤褐色	輪轆き造り(?)平 瓦の広端に粘土を 付加し階段き三 重瓦文をつくる。 瓦当部宛存。	20-9
⑭	32 次 表地はやや粗く石 英・片岩粒を多 く含む	硬質	外面赤褐色、断 面赤褐色	輪轆き造り(?)平 瓦の広端を、溝を 彫って范上におい た瓦当部にきき込 ませてつくる。瓦 当部宛存。	20-10	
⑮	32 次 N 24-25 E 137-145 表土下層	表地は粗く石英・ 白色灰雑物を多 く含む	硬質	外面・断面とも 灰白色	輪轆き造り平瓦の 広端を溝を彫って 范上においた瓦 当部にきき込ませ てつくる。瓦当部 宛存。	20-10
⑯	32 次 N 27-28 E 143-143 地山層上	表地は粗く石英・白 色灰雑物を含む	硬質	外面黒灰色、断 面灰色	一枚造り平瓦の広 端に粘土を貼付し 、范に押圧して つくる。瓦当部 宛存。	20-10
⑰	32 次 N 24-25 E 137-145 表土下層	表地は粗く石英・白 色灰雑物を含む	硬質	外面・断面とも 暗灰色	一枚造り(?)平 瓦の広端に、粘 土を貼付し、范 に押圧してつくる。 瓦当部宛存。	20-10

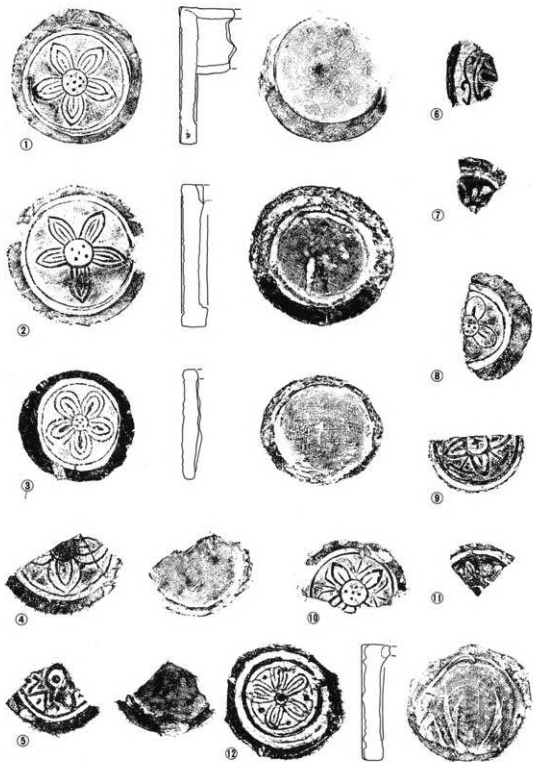


Fig. 26 第31次調査区出土軒丸瓦 縮尺1/5 ⑫は第30次調査区出土

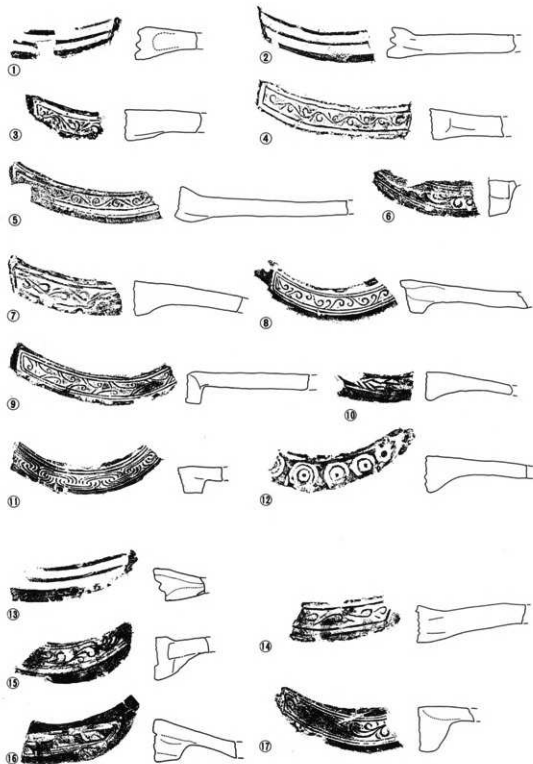


Fig. 27 第31次調査区出土軒平瓦 縮尺1/5

⑬~⑰は第32次調査区出土

5. 第32次調査

(1) 遺構

寺域東辺部については昭和56年度の第5トレンチ・推定東大門周辺の調査で、掘立柱建物1棟・竪穴式住居6軒・土塼・溝などととも、史跡地東端にあたるN17・E132で、100×70cmの楕円形をした上面が平坦な礎石とみられる自然石1個の所在が確認された。この石は西側に傾いており、根石とみられる円礫も攪乱をうけた状態であることから、原位置からは若干移動しているとみられた。石の南東側は地山が約50cmの深さに掘られ、その内部は粘性のある黒色土で埋められていた。周辺には軒瓦を含む瓦片が多数散布しており、またこの礎石の位置が金堂中心から106.8mの距離にあたることなどから、東大門の西側柱列の礎石の1つであると推定された。これより先、昭和45年(1970)に実施された国分僧寺と尼寺との中間地域の状況確認調査において、第5トレンチと小道を隔てた東側で部分的な発掘調査が行われた。この時に第5トレンチで検出された礎石の北東間近の位置で、これに類似した自然石1個の所在が確認されている。ただこの石も原位置から移動した状況であり、関連する根石なども検出されていない。またこの周辺の地山上面には床面状の基礎工事的加工が行われた痕跡があったこと、土器片および瓦片がかなり散布していたことが報告されている。これらの状況から、この付近に東大門があること、また周辺では8世紀後半から9世紀にかけての住居が検出されており、それらは国分寺の建立とその維持に当たった工人等の住居であると推定された。

今回はこれらの成果をうけて、第5トレンチと小道を隔てた東側で、昭和45年に礎石とみられる石の確認された付近の拡張調査を行った。調査地は史跡地外の民有地で桑畑となっており、南・西側に農道、北側に家屋への進入路がある。このN18-35・E137-145の範囲を発掘調査した。その結果、溝2条(SD14・15)、土塼、墓跡などが検出され、また浅間B軽石層の所在と瓦片の散布の状況が確認された。しかし、南・西側で昭和45年の調査グリットを合むとみられる道路際まで調査区を広げたが、今回調査の主な目的である礎石とみられる石の所在は確認できなかった。道路の拡幅・改修があったため現在の道路下に入っていることが考えられるが、N18・E137の地表面に大型の石を破砕したものとみられる一抱え大の石が3個車止めとして置かれており、これがその名残りである可能性もある。調査区は全体に地山の黄褐色土あるいはその下部にある黄褐色砂質土まで攪乱が進んでいる。E145ラインでみると、N18で地表面の標高が128.70m、黄褐色土面が128.17m、N25で地表面が128.80m、黄褐色土面が128.30m、N35で地表面が128.88m、黄褐色砂質土面が127.86m付近にある。またN18・E139では地表面が128.70m、暗褐色土面が128.10m、N35・E137では地表面が128.85m、黄褐色土面が128.30m付近にある。SD14 N19-27・E142-143の灰褐色土および黄褐色土面で検出された。上部幅約80cm、底部幅約60m、深さ20cm前後で浅く「U」型に掘られた南北溝。南端部はN19にあるが、N22でSD15によって切られており、北端はN27で円形土塼によって壊されている。方位はN-14°30'-Wを示す。底部は凹凸が多く、瓦片が僅かに散布する。埋土は黄褐色粘質土である。時代、性格

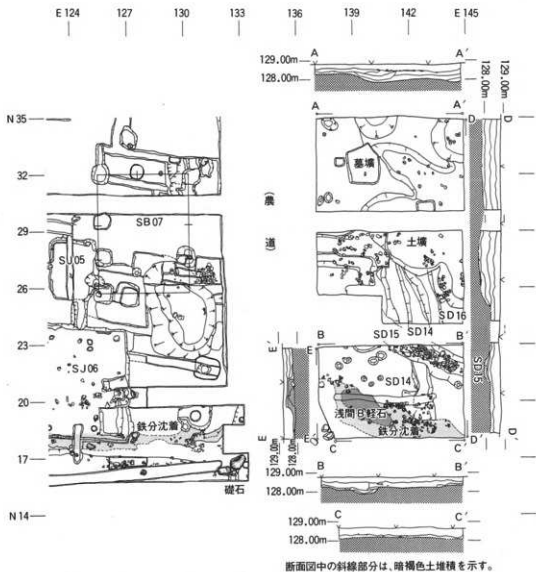


Fig. 28 第32次調査区全体図 1/200 E133以西は第5トレンチ調査区分

については不明である。

SD15 N21~23・E140~145の灰褐色土面で検出された。上部幅約150cm、底部幅約70cm、深さ約30cmで「U」型に素掘りされた東西溝。全長370cm分を検出したのみであるが、方位はE-22°30'-Sを示す。埋土は下部が黄褐色粘質土でよくしまっており、上部は暗褐色粘質土で拳大から径30cm大の円礫、破砕石片を多量に含んでいる。SD14を切って造られている。時代・性格については不明である。

N25~35・E140~145にかけて地山を掘り込む不正円形の土壌が多数あり、これらの底部近く

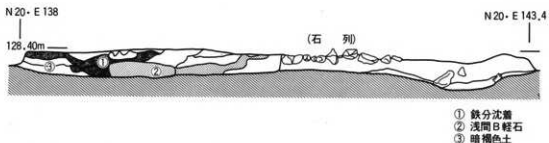


Fig. 29 鉄分沈着・浅間B軽石堆積状況断面 1/40

には礫と瓦片が散布している。埋土は暗黄褐色土を主体とし、しまりに欠ける。時代・性格を示す遺物の出土は確認できなかった。N26~35・E137~141には黄褐色土の上に黒褐色土が堆積しており、この中から人骨小片と素焼き皿および多量の礫が出土している。墓竈が造られていたものとみられるが、攪乱が著しく原形は確認できなかった。

N18~21・E138~145で地山である黄褐色土上面に鉄分が沈着しており、その上に瓦小片が多量に散布する状況が検出された。E141~143ではこの上に暗褐色土が堆積しており、そのN20ラインの位置に東西の長さ130cmで玉石、破碎石片が一行に9個北面を揃えるようにして並べてあるのが認められた。またN19~22・E138~142では、暗灰褐色土の上に堆積する暗褐色土が窪んだ部分に浅間B軽石の純層堆積がみられた。この下面は128.10m、上面は128.30m付近にあり、下面には玉石、瓦片が散布している。この堆積状況は、第5トレンチで検出されたN16~20・E122~132と類似するものであり、これによって国分寺存続期の面は黄褐色土面で、暗褐色土は浅間B軽石の降下以前に堆積した層であることがわかった。

今回の調査では、東大門の遺構自体を確認することはできなかったが、N18~21に鬼瓦片、軒瓦片を含む多量の瓦が散布すること、そして浅間B軽石下の土層の状況からN18~20.5・E137~138.5の範囲が周辺よりも高い地形となっていたことなどから、ここから南西にかけて東大門があった可能性を強めることができた。また東辺外溝とみられる遺構は検出されなかった。

(2) 遺物

全体に遺物の出土量は少ないが、その中では瓦片の多いことが目立つ。瓦溜りなどの形成はみられないが、全域に瓦片が散布し、その中には軒丸瓦と軒平瓦が7、8点ずつ、鬼瓦が2型式分含まれていた。鬼瓦の大型のものは、これまで出土例のほとんどみられないものである。瓦片はN23以南に多く散布しており、東大門に係わるものとみられる。土器類の出土は僅かであり、須恵器杯、土師器杯片があるが、直接遺構に伴うものは認められない。これら以外には土師質の皿が出土しているが、付近に骨片の散布がみられることから、墓竈の埋納品であるとみられる。また調査区全域に小児頭大の礫と扁平玉石が散乱しており、北西から南東への走向を示す小溝SD15の内部には多量に投げ込まれた状態であった。

Table.13 第32次調査区出土遺物 (Fig. 30)

番号	出土位置	種類	法 量 (cm)			胎 土		焼 成 色 調	成 形 ・ 調 整 ・ そ の 他	図版番号
			口 径	底部径	高 さ	素 地	挟 雜 物			
①	E137-145 N 18-23	須 恵 器 高台付杯 表土下層	—	6.8	—	やや粗	褐色紅物、 片岩細粒を 僅かに含む	やや硬質 黄灰色	右回転ロクロ成形後、底部赤切 付高台。底部小破片。底部外面 に「□福」の墨書あり。	P.L. 18-1
②	E138-139 N 26-27	土 師 質 杯 墓壇覆土	10.2	4.6	2.9	やや粗	米粒大の灰 色紅物を含 む	やや軟質 黄褐色	右回転ロクロ成形後、底部赤切 未調整。完形。	
③	E138-143 N 30-35	土 師 質 小 皿 表 土	7.8	5.4	2.1	粗	砂粒を含む	軟 質 黄灰色	左回転ロクロ成形後、底部赤切 未調整。完形。	18-2
④	E138-139 N 27-28	土 師 質 高台付杯 表土下層	11.6	7.0	4.7	やや粗	黒色紅物を 含む	やや軟質 黄褐色	左回転ロクロ成形後、底部赤切 り付高台。 口辺写を欠損。	18-3
⑤	E137-138 N 20-22	鬼 瓦 地山直上	—	—	—	やや粗	白色紅物細 粒をやや多 く含む	硬 質 黄赤褐色	型の上におき粘土板敷枚を 重ねて成形。范は大雑把である らしく、区画線以外の条線や付 点についてはヘラガキする。左 側端の下部破片。	18-4
⑥	S D 16 地山直上	鬼 瓦	—	—	—	やや粗	石英白色紅 物をやや多 く含む	硬 質 灰 色	⑤とはほぼ同巧だが、范はより しっかりしている。大小2種以 上あるうちの大型品か。左側端 部破片。	18-5

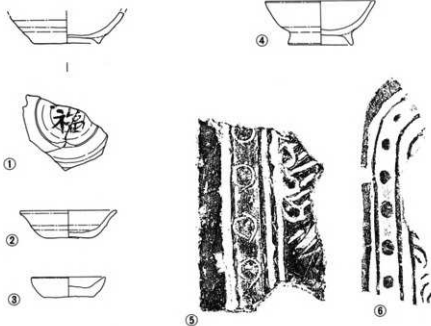


Fig. 30 第32次調査区出土遺物 縮尺1/4

V 文字瓦

これまでの調査で出土した文字瓦は1,600点を越えるが、今年度の調査では76点出土した。このうち押印は4点、記号は13点であり、それ以外はヘラ書である。調査次別では、第30次で4点、第31次で60点、第32次で11点、不明1点であり、瓦の出土量に比例している。第31次では、南大門西側近くの南辺築垣北側に形成された瓦散布地と瓦溜りに多く、南辺外溝とその周辺に掘られた土城、S K 96からのものがそれに次ぐ。

この中で注目されるのは「山字物ア城成」(Fig. 31—①)である。「山字」は多胡郡山字郷(高崎市山名町付近)を示し、そこを本拠とする物部氏の存在を示す。南大門付近の瓦溜からは九瓦凸面に「山字物ア子成」とヘラ書きされたものが出土しており、両者は関係するものとみられる。「山浄江」(Fig. 31—⑱)の「山」は「山字」の省略型で、同郷の某浄江を示す。「成鯨」(Fig. 31—②)は同文字のものが第27次のS J 23から出土しており、類例の検討から「成」は「武」の崩しで、多胡郡武美郷を示すことがわかる。「口秋足」(Fig. 31—⑭)は類例から「武秋足」であり、武美郷の某秋足を示す。また「八里人」(Fig. 31—⑰)は同郡八田郷の某里人を示す。これまでの傾向と同様にヘラ書には、多胡郡の郷名と人名とを記すものが多いことが知られる。

Table.14 文字瓦 (Fig. 31)

番号	内容	種類	部位	出土位置	備	考	図版番号
①	山字物部城成	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 B 軽石層下瓦散布	一枚作り、凸面に粘土板割き取り痕が目立つ		P. L. 21-1
②	武鯨	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 B 軽石層下	布目は細かい		21-2
③	千	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 B 軽石層下	下部を欠失		21-3
④	手	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 B 軽石層下瓦散布			21-4
⑤	子	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 B 軽石層下	左部を欠失		21-5
⑥	##	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 B 軽石層下	下部を欠失		21-6
⑦	圖	押印(除刻)	平瓦凸面	31次 B 軽石層下			21-7
⑧	○	押印(竹管)	丸瓦凹面	31次 B 軽石層下			21-8
⑨	信人	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 瓦溜	右部を欠失		21-9
⑩	八身	ヘラ書き	平瓦凸面	31次	下部・左部を欠失		21-10
⑪	八里人	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 S F 01南縁下			22-1
⑫	大十	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 瓦散布			22-2
⑬	石井	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 瓦散布	右部を欠失		22-4
⑭	口秋足	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 瓦散布	上部を欠失		22-5
⑮	生	押印(除刻)	平瓦凸面	31次 S K 94埋土	斜格子印きあり、右部を欠失、布目は細かい		22-6
⑯	多	ヘラ書き(左字)	平瓦凸面	31次 S K 96南半部埋土	下部・右部を欠失		22-7
⑰	店	ヘラ書き	平瓦凸面	31次 S F 01南縁下			22-8
⑱	道	ヘラ書き	平瓦凹面	31次 S J 39	右部を欠失		
⑲	山浄江	ヘラ書き	平瓦凹面	32次 表土下層	下部・左部を欠失、軒平瓦(頸部を欠失)		22-9
⑳	小月	ヘラ書き	平瓦凸面	32次 表土下層	下部を欠失		22-10
㉑	口阿	ヘラ書き	平瓦凸面	32次 表土下層	上部・右部・左部を欠失		22-11
㉒	家	ヘラ書き	平瓦凸面	32次 表土下層	上部・右部を欠失		22-12



Fig. 31 文字瓦 縮尺1/3

VI ま と め

今回の調査の成果のまとめと課題とを記しておく。

塔跡南側の第30次調査は、昭和60年度の第27次調査区を拡張する形で行った。この付近は黄褐色粘質土の地山が高くなる地形で、縄文時代中期の竪穴式住居（S J 29）から中世の竪穴式住居（S J 31）まで検出されていることから、古くから居住適地であった状況が窺える。国分寺創建以前の遺構としては、7世紀末頃の竪穴式住居 S J 32・S J 33があるが、両者は重複しており S J 32が先行する。これは第27次調査で検出された S J 17・S J 18と同時期のものであり、この付近に3軒が一まとまりとしてあったことが推定できる。この中では S J 18が規模が大きく柱穴をもっており、一群の中心的立場にあったと想定される。これに続く8世紀前葉の竪穴式住居 S J 30が検出されたが、これは第27次の S J 16・S J 24と同時期のものであり、これら3棟の中では最も大型で、柱穴をもつ唯一のものである。この国分寺創建以前の2時期の住居群は、(1)3棟で一群を形成する、(2)1棟が他に比べて大型である、という点で共通性をもち、奈良時代前期におけるこの地域の集落の単元のあり方を知る上で注目されるものである。第30次調査では国分寺建立に関係するとみられる遺構が確認されなかったことから、この期の構造物としては第27次調査で検出された S B 12が主要なものであり、それに S A 03、S B 11が併う簡素な構成であったことが知られる。また寺域内のこの付近では、これまでのところ国分寺建立後間もない8世紀後葉から9世紀中葉までの住居が検出されていない。9世紀後葉になると、銅の溶解などを行った工場である S K 85・S K 86が造られている。これは第27次調査の S K 67・S K 68・S J 19と一連のものである。竪穴式に掘り込まれた住居に類似した構造であるが、平面形は方形を基本としているものの張り出しや拡張部分があり不整形である。床面には数ヶ所に炬が設けられていたが、その配置に規則性は認められない。S K 85から出土した須恵器塚に「造仏」の墨書があったのが注目される。上野国分寺の造仏については、「上野国交替実録帳」金光明寺項に「丈六十一面観音像壹体、件観音像、依一長保三年五月十九日官符一、前前司平朝臣□義奉造供養即安二置金堂一者」とあって、長保3年（1001）に出された太政官符に従い、介であった平重義が丈六十一面観音像一体を新たに造って金堂に安置したことが知られる。平重義の任期から、この造仏は1001～1005年の間になされたものと判断される。S K 85などの規模と構造とからみて丈六仏を造り得るような工場とは考え難く、また土器の年代もこれよりは古いものであり、この墨書と残存史料とが直接結びつくとは言い難い。ただこの墨書により上野国分寺の経営が進む中で、9世紀代に造仏作業が行われたか、あるいは造仏を担当する部門が設置されていたことを窺い知ることができる。南辺祭壇（S F 01）については、基部が残存していたのみであるが、南辺外溝（S D 01）が比較的良好な状態で検出された。W50付近では幅が11m以上と広がっているが、これは S F 01が北側へ屈曲していることによるものとみられる。そしてこの中の堆積土中に中世の生活面が確認されたが、これによって外溝部分が皿状の窪地になっていたことがわかった。これは塔跡南側および S F 01南縁部分に墓塚や土壌が造られていくといった、国分寺廃絶後の景観を復元していく上で重要な意味をもつものである。

第31次調査では、寺域南外側西半部の地形と遺構の概要を知ることができた。地山および自然堆積層は北西から南東に向って僅かに低くなる形状を示し、また遺構は南辺築垣から20~30mの範囲に集中しており、それより南には顕著な遺構はほとんど認められなかった。国分寺創建以前の遺構としては6世紀前葉の竪穴式住居S J 35・S J 41があったが、この時期の遺構としては第22次調査の、金堂と南大門の中間で検出された竪穴式住居S J 09・S J 10・S J 11があるのみである。それに続くものとしては調査区南東端で検出された7世紀後葉の竪穴式住居S J 45が、S D 01の南岸近くに9世紀前葉の竪穴式住居S J 34がある。10世紀から11世紀初頭の遺構としては竪穴式住居S J 37・S J 43など、同時期のものとみられる土壌S K 87・S K 97など多数がある。これまでに寺域南西部周辺で確認された竪穴式住居などのあり方をみると、(1)古墳時代後期のものは寺域の内側と外側とに点在し、地山の高い場所に占地している、(2)7~8世紀のものはS J 45を除いて寺域内の地山の高い場所に造られており、3棟で1単元をなす状況を示している、(3)9世紀代のは寺域内に多く、工作場としての性格をもつが、寺域外のS J 34は一般的な住居である、(4)10~11世紀のものは南辺築垣基部と重なるS J 21・S J 22を北端とし、それ以外は寺域南辺外側に沿って造られている、といった傾向のあることが認められる。局所的な状況からの所見であるが、国分寺創建以前には地山の高い居住条件の良い場所を選んで家が造られていたが、建立の後は当然のことながら寺域内には一般的な家は造られず、修造用の施設のみが造られていった。ただS D 01のすぐ南側にS J 34が造られており、9世紀代には寺域外側について規制が緩んでいた可能性が窺える。そして10世紀代には寺域南辺の外側に家や土壌が造られることが珍しくなくなり、やがて寺域内である築垣跡にも家が造られるようになった。ただこの時期の家は、これより内側の寺域中央部には確認できず、また寺域南外側に広く展開して造られる状況も認められない。これらは瓦を伴う以外には、特に国分寺との関係を示す特徴は見出し難いが、あるいは国分寺と何等かの関連をもつ人々の家ないしは施設であった可能性も考えられる。第31次調査では南大門西側で検出した南辺築垣の北側で、国分寺存続期の生活面を確認することができた。この面は南大門北側の生活面に比べると約20cm低くなっている。検出された面上には多量の瓦片が散布し、その上には瓦片を含む堆積土、さらに天仁元年(1108)降下の浅間B軽石層がある。この状況から、南辺築垣は天仁元年以前に崩壊し、それ以降再建されることがなかったことがわかる。これは南大門および第27次調査で確認された状況と同様である。

遺物としては、第30次調査区のS K 77から出土した鯉口の存在が目される。仏教遺物としては、寺域内の金堂跡周辺から14~15世紀の年号をもつ石造物が、寺域北側の東国分集落内から「上野州群馬郡府中妙見寺」「応永十七年庚寅十一月三日」の銘をもつ銅鐘が出土している。これらは金堂跡・塔跡の南側、南辺築垣の南斜面沿いで多数検出されている墓塚や土壌と密接に関連するものとみられる。国分寺の廃絶時期とその後の使用の状況を解明する上での有力な手掛りであり、今後さらに精査と類例の調査を進めていく必要がある。



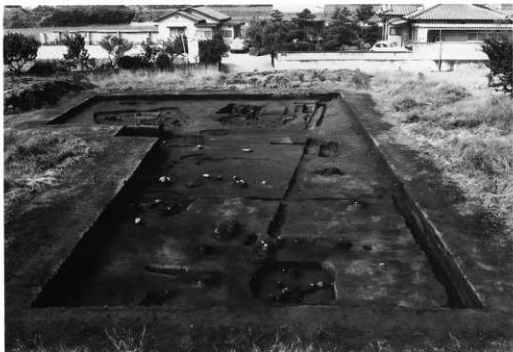
調査区全景空中写真



1. 第30・31次
調査区全景



2. 第30次調査区全景
(南から)



1. 第30次調査区北部 (東から)



2. 第30次調査区 SJ30 検出状況 (西から)



1. 第30次調査区
SJ32(右)・SJ33(左)
検出状況(西から)



2. 第30次調査区
SK82(左)・SK85(中)
SJ32(右) 検出状況
(南西から)



3. 第30次調査区 SK85炉跡
検出状況(東から)



4. 第30次調査区 SK86 検出状況(東から)



1. 第30次調査区 SF01 検出状況 (南から)



2. 第30次調査区 SF01-SD01 検出状況 (西から)



1. 第30次調査区
SJ 31 検出状況(南から)



2. 第30次調査区
SJ29(左上)・SK77(右下) 検出状況(西から)



3. 第30次調査区
SK77 鯿口出土状況
(南から)



1. 第31次調査区 東半部 (南から)



2. 第31次調査区 西半部 (南から)



1. 第31次調査区 SJ41 完掘状況 (西から)



2. 第31次調査区 SJ45 検出状況 (南西から)



1. 第31次調査区 SJ34検出状況(西から)



2. 第31次調査区 SB14検出状況(東から) 右上はSJ34



1. 第31次調査区
SJ37 検出状況 (西から)



2. 第31次調査区
SJ38・SJ39・SJ40
SD13 検出状況(西から)



3. 第31次調査区
SJ35・SJ42・SJ43・
SJ44 検出状況(東から)



1. 第31次調査区 SF01・SD01・SK96 検出状況 (南から)



2. 第31次調査区 SF01・瓦溜 検出状況 (東から)



1. 第31次調査区
浅間B軽石層下瓦溜
検出状況（東から）



2. 第31次調査区
浅間B軽石層下瓦溜
出土状況



3. 第31次調査区
SK96・瓦溜 検出
状況（東から）



1. 第32次調査区全景 (西から)



2. 第32次調査区 N18~29 検出状況 (南から)



1. 第32次調査区 N24~29 検出状況 (西から)



2. 第32次調査区 N30~35 検出状況 (西から)



1. 30次 S J 30 土師器环



2. 30次 S J 30 土師器环



3. 30次 S J 32 土師器环



4. 30次 S J 32 土師器环



5. 30次 S K 85 須恵器环 墨書「造仏」



6. 30次 S K 85 増埴



7. 30次 S K 86 羽口



8. 30次 S K 86 須恵器高台付环

9. 30次 S K 86 増埴



1. 30次 SK 77 鯛口



2. 30次 SK 77 石製品 (部分)



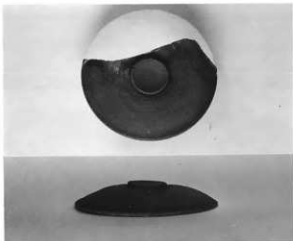
3. 30次 SK 77 土師質皿



6. 30次 ST 73 土師質小皿



7. 30次 ST 73 土師質皿



4. 30次 SD 01 須恵器蓋



5. 30次 SD 01 土師器环



8. 30次 SD 01埋土 内耳鍋型土器



1. 31次 S J 41 土師器甌



2. 31次 S J 41 土師器甕(カマド芯材)



3. 31次 S J 41 土師器环



4. 31次 S J 35 土師器环



5. 31次 S J 45 土師器环



6. 31次 S J 45 土師器环



7. 31次 S J 34 土師器环



8. 31次 S J 39 紡鐘車



9. 31次 S J 39 鉄製品



10. 31次 S T 75 土師質皿



11. 31次 S D 01底部 青磁碗片 左 外面 右 内面





2. 32次 表土 土師貫小皿



1. 32次 表土下層 須恵器高台付環 墨書「口福」 3. 32次 表土下層 土師貫高台付環



4. 32次 地山直上 鬼瓦片 左表面 右裏面



5. 32次 SD16 鬼瓦片 左表面 右裏面 6. (参考) 15トレンチ拉張瓦溜出土 鬼瓦



1. 31次 SD01



2. 31次 SK96



3. 31次 SK96



4. 31次 SD01



5. 31次 B軽石層下瓦溜



6. 31次 B軽石層下瓦溜



7. 31次 瓦散布



8. 31次 SD01



9. 31次 B軽石層下瓦溜



10. 31次 SD13



11. 30次



12. 30次 SK82



1. 31次 瓦溜



2. 31次 SF01 基部



3. 31次 瓦溜



4. 31次 瓦溜



5. 31次 B軽石層下瓦溜



6. 31次 SD01



7. 31次 B軽石層下瓦溜



8. 31次 SK94



9. 32次 地山直上



10. 32次 表土下層



1. 31次 B 軽石層下瓦散布 「山字物了城成」

2. 31次 B 軽石層下「武鯨」



3. 31次 B 軽石層下「千」

4. 31次 B 軽石層下「手」

5. 31次 B 軽石層下「子」



6. 31次 B 軽石層下「井井」

7. 31次 B 軽石層下 押印「囿」



8. 31次 B 軽石層下
竹管押印「○」

9. 31次 瓦溜 「体人」

10. 31次 「八身」



1. 31次SF01 南縁下「八里人」



2. 31次瓦散布「大十」



3. 31次「大千」



4. 31次瓦散布「石井」



5. 31次瓦散布「□秋足」



6. 31次SK94 押印「生」



7. 31次SK96「多」(左字)



8. 31次SF01南縁下「店」



9. 32次表土下層「山浄土」



10. 32次表土下層「小月」



11. 32次表土下層「□阿」



12. 32次表土下層「家」

参 考 文 献 (近年刊行の上野国分寺関係の報告・論文など)

- 関口 功一「上野国分僧寺金堂基壇中出土瓦について」 東国史論 第1号 1986年
- 前沢 和之「史料と遺構の狭間を旅して—史跡上野国分寺の調査に思うこと—」『ほり出された下野の古代—出土品が語る東国の古代史—』栃木県立博物館第15回企画展図録 1986年
- 前沢・関口「群馬県 史跡上野国分寺跡」 日本考古学年報37 1986年
- 関口 功一「大宝令制定前後の地域編成政策—和銅四年の多胡郡設置問題をめぐって—」 地方史研究 201 1986年
- 松田 猛「群馬県における文字瓦と墨書土器—前橋市上西原遺跡出土の文字資料—」 信濃 第38巻11号 1986年
- 横倉 興一「上野国府周辺における条里遺構の問題点」 条里制研究 第2号 1986年
- 関口 功一「鍬川流域の条里的地割—条里的地割の設定と持続に関する一事例—」 条里制研究 第2号 1986年
- 桜場 一寿「上野国分寺」 『群馬県史 資料編2 原始・古代2 弥生・土師』 1987年

調 査 関 係 者 (敬称略)

発掘作業員

阿久津悦子 一倉ヤヨイ 入沢喜一 大塚みつゑ 金井もとえ 川端キヨ子 菊地松之助
胸形邦子 田原かねえ 田原義昌 塚田マサエ 塚田みさほ 塚田光代 塚田幸雄
仲野俊雄 蜂須賀トミ子 蜂須賀美栄 原沢政雄 東野菊江 東野トクエ 東野ノブ子
柳原久仁江

整理補助員

横澤永子・萩原 泉(群馬大) 石原清和(芝浦工大) 持谷明宏(中央大) 住谷宏之
(帝京大) 宇佐美葉子(山形大) 田村葉子(国学院大) 松田万里子 大嶋町子
塚田裕子 小沢美子 鈴木愛子 本多恵美 加藤康子

協 力

群馬町教育委員会 前橋市教育委員会 群馬町東国分地区 群馬県埋蔵文化財調査事業団

この他に住谷宗七 福田弘一(東国分区長) 住谷純一郎ほか多くの方々のご協力とご指導を得た。

史跡上野国分寺跡発掘調査概要 7

印 刷 昭和62年3月25日
発 行 昭和62年3月30日
発 行 群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1-1
T E L 0272-23-1111
編 集 群馬県教育委員会文化財保護課
印 刷 株式会社 前 橋 印 刷 所